



●● 第62回全国俳句大会 大会賞 ●●

金魚買ひ水の重さを持ち歩く

東京都

関戸 せきど

信治 しんじ

ただそこに立つために訪ふ爆心地

大阪府

今井 いまい

文雄 ふみお

メモになき鯛焼二つ買ひにけり

広島県

池田 いけだ

萩邨 しゅうそん

難民の手に囲まるる焚火かな

長崎県

牛飼 うしかい

瑞栄 みづえ

鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く

埼玉県

島貫 しまぬき

恵 めぐみ

●● 第62回 全国俳句大会 秀逸賞 ●●

夏芝居影絵のやうに始まりぬ

東京都

浦田 祐子
うら た ゆう こ

搾乳機洗ひ清めて卒業す

神奈川県

松下 宏民
まつした ひろ たみ

能登半島海へ海へと田水張る

東京都

内田 廣二
うち だ ひろ じ

耳飾りはづし夜学の席に着く

愛知県

古賀勇理央
こ が ゆ り お

固まりをほぐせば四匹の子猫

滋賀県

小野 雅子
お の ま だ こ

春泥を飛び越え走者また走者

岐阜県

ひろせ
廣瀬あや子

膝ついてしまへば本気潮干狩

宮崎県

いいぼし
飯干 久子

背負ふ子に若布にぎらせ若布干す

神奈川県

ながはま
長浜よしこ

亡き夫と選びし墓に詣でけり

東京都

ひらの
平野 征子

代替りせし顔ばかり農具市

富山県

なかつば
中坪 達哉

鳥雲に入る消印の街遠し

岐阜県

もり
森 瑞穂

次頁以降、各選者の特選三句及び入選二十句。
空欄は類句や既発表句のため削除したもの。

石井 いさお 選

伊藤 伊那男 選

難民の手に囲まるる焚火かな

長崎 牛飼 瑞栄

夏芝居影絵のやうに始まりぬ
返したる平目に貌の無かりけり
亡き人の分も米研ぐ彼岸かな

東京 浦田 祐子
兵庫 瀬戸 幹三
千葉 塩野谷 慎吾

早苗饗の仕上げ越中おわら節

兵庫 長井 良孝

こんなにも足の大きく卒業す
ぶら下がるだけの鉄棒鳥渡る

岡山 藤田 明子

凍蝶の陶片と化す大地かな

東京 坂内 時子

大鍋に火の粉飛び込む芋煮会

京都 池田 華甲

杼となりて雨の糸織る燕かな

東京 樋口 昇る

ブロッコリー逆さに立てるマヨネーズ

東京 佐藤 孝志

流し雛一縷の水も濁さざる

大分 岩波千代美

吊革の揃つて揺るる夕焼かな

東京 関口 昭男

炎ごと倒れ出したるどんどこかな

新潟 小林 純子

まづ縮み尺蠖尺を取りはじめ
メモになき鯛焼二つ買ひにけり

愛知 舘野 茂子

とんぼにはとんぼの空の高さあり

富山 脇坂琉美子

白息の間ひ白息でかへしけり

神奈川 高橋 眞也

水よりも透け白魚の隠れけり

三重 西尾 敬一

つもるだけつもればしづか雪下す

広島 池田 萩邨

演出の手のひとつ鳴り初稽古

神奈川 柿沼 盟子

秋風やたがひに違ふものを見て

埼玉 三浦 恭

烏賊を干す家ごとにある船着場

大阪 吉田 喬

昭和の日チキンライスに国旗立て

新潟 小黒 音榮

三寒の窓くもらせる牛の息

静岡 中川 正男

ほうたんの芽にしてすでに威をはれり

富山 脇坂琉美子

咳の夜の背中に母の手の記憶

鳥根 八嶋 昭男

ひとりとはもう減らぬこと蜆汁

岐阜 森 佳子

唐橋に比良八荒の横殴り

茨城 宮丸千恵子

姉欲しと兄欲しと吹く石鹼玉

青森 中谷 恭子

鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く

滋賀 渡辺 雛

膝ついてしまへば本気潮干狩

大分 富川 元女

レコードの飛びたる音も夜半の秋

埼玉 島貫 恵

点さねば訪ねて来さう雪女

千葉 長澤きよみ

搾乳機洗ひ清めて卒業す

石川 太田 硯星

摘ふまで言葉つつしむ雑煮の座

宮崎 飯干 久子

月餅やゴビの起伏に月浮かぶ

神奈川 松下 宏民

今生の花と語らふ吉野建

広島 石橋 康徳

朝ざくら淡き湯気立つ集乳缶

広島 飯野 幸雄

壺焼の螺旋のからだ引き出せり

滋賀 藤田 啓子

横抱きに釣針外す花見鯛

静岡 間島あきら

愛知 佐藤美恵子

鳥根 足立 歩久

部屋に礼言ひて退院朝ざくら

愛媛 青野 忠重

東京 中島悠美子

東京 中島悠美子

井上弘美選

今井

聖選

ただそこに立つために訪ふ爆心地

大阪 今井 文雄

天辺に捨てられし田や田螺鳴く

新潟 小黒 音榮

しばらくは燕見てをり往診医

三重 川村 清子

能登半島海へ海へと田水張る

東京 内田 廣二

折紙の鞍を置きたる茄子の馬

愛知 渡辺美智代

差し潮のかがよふ島の難流し

広島 坂本たか子

投げ餅で終はる御田植神事かな

広島 坂本たか子

校庭は子らをこぼさず青田風

兵庫 千鳥 由貴

火山灰の雲越えてはるかに鶴帰る

鹿児島 徳田 正樹

伏せて待つ盲導犬に花吹雪

岡山 岡田 邦男

背負ふ子に若布にぎらせ若布干す

神奈川 長浜よしこ

うりずんや蒲葵の葉で編む子の玩具

沖縄 西原 洋子

鶉籠編む竹ひるがへす小春かな

広島 坂本たか子

ひろしま忌橋の下には橋の影

広島 坂本たか子

円位忌の浜の小石は花の色

東京 本多 遊子

獣医来てまづは牛蛇払ひけり

静岡 中川 正男

研ぎ屋来てひかりを増やす百千鳥

秋田 岸部 吟遊

鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く

埼玉 島貫 恵

夕蟬の声にはじまる野外弥撒

愛知 古賀勇理史

花御堂羽根のきれいな鳥よぎる

静岡 渥美 絹代

漁り火の増ゆる八十八夜かな

岩手 木関 偕楽

草の絮飛んでひなたの残りけり

神奈川 緑川美世子

東京で買ふふるさとの寒卵

東京 田中 久幸

日永し待合室のシーラカンズ

富山 四十物文代

桜薬ふるもう犬は飼へないと

東京 安藤 潤子

ピラミッド観ぬうち日焼して老いぬ

滋賀 土井 妙子

シユラフより顔出して待つ流星群

岐阜 直井 照男

唐辛子吊つてますます頑固かな

神奈川 倉谷 安子

草餅の粒餡どかと母の郷

長崎 出田 量子

鶏と半分こする春キャベツ

茨城 染谷 翠溪

目玉焼ぶるると合格通知来る

島根 江角 純子

みちのくの空の冥さや菊脛

広島 坂本たか子

投げ餅で終はる御田植神事かな

広島 坂本たか子

我が子ほど涼しきものは無かりけり

広島 坂本たか子

浮島は植物遺体春うらら

和歌山 羽賀 明

日直のわが名を消して卒業す

神奈川 浅木 ノエ

演出の手のひとつ鳴り初稽古

神奈川 柿沼 盟子

ふと靴に乗って動かぬ初蛙

秋田 浅野 法子

門前に大福を買ふ傀儡師

新潟 山本 武子

膝ついてしまへば本気潮干狩

宮崎 飯干 久子

しばらくは燕見てをり往診医

三重 川村 清子

花ちるや地に晩年の膝頭

高知 宮尾 直美

母に抜く小骨百本春鰯

石川 引持 幸子

日向ほこ人であること薄れゆく

石川 國田 欽也

童顔のまま古雛となられたり

岐阜 園 るみ子

今瀬剛一選

上田日差し選

歌垣の山懐の初音かな

千葉 佐々木リサ

耕人のまづ一握の土を見る

埼玉 中村 鈴子

春灯のぼつんと夢を見てゐるか

千葉 祐 森司

実よりも虚のおもしろき瓢かな

大阪 守作けい子

ふるさとの山は濡れ色春の月

兵庫 秋山 薫

梅の実を挽ぎて闇夜を軽くせり

宮城 石森千賀子

豆を打つ声はづみけり船溜り

広島 坂本たか子

能登半島海へ海へと田水張る

東京 内田 廣二

代替りせし顔ばかり農具市

富山 中坪 達哉

まくなぎの遊びに少し入れてもらふ

東京 土居ノ内寛子

躰づきし土やはらかき諸葛菜

静岡 太田絵津子

わが影をばさと放ちて黒揚羽

鳥取 玉井 瑛子

夏つばめ風の段差に入りにつけり

三重 米野てるみ

創世のノイズ幽かに冬銀河

東京 野上 卓

みちのくの空の冥さや菊膾

広島 坂本たか子

金魚買ひ水の重さを持ち歩く

東京 関戸 信治

雪女来るやも飛驒の和蠟燭

静岡 鈴木 齊夫

ひよいと手に取る草餅のゑくぼかな

東京 杉木 美加

抱く子の丸ごと柔き春の昼

北海道 濱崎 敏子

カウベルの音の風来る夏野かな

神奈川 井手 浩堂

五七調身の内にあり実朝忌

埼玉 野木 和美

ままごとのやうに雛を飾りけり

北海道 広瀬むつき

狛犬を撫でゐて受験生らしき

北海道 伊藤 黎

産声ははじめての息春の星

東京 佐瀬はま代

待つといふ長閑さのあり昼の酒

神奈川 岩下 正文

子燕の空の青さにまだ触れず

静岡 関口喜代子

笑ひ声きれいな人と春惜しむ

埼玉 草地 明子

夏芝居影絵のやうに始まりぬ

東京 浦田 祐子

春ともし繕ふ衣のやはらかく

東京 長尾ゑみる

観客は畑の一人さへづれり

鳥根 八嶋 昭男

ごくごくと飲む耕しのあとの水

青森 小野 寿子

枯蟪蛄粘るるやすらぎありにけり

三重 武田 巨子

花筵まづ真ん中へ嬰這はす

愛知 古賀勇理央

沖繩忌母に老いの日なかりけり

沖繩 宮城 勉

花を発ち花に戻れり観覧車

京都 小原 緑

浮世絵の上目遣ひや春の宵

東京 山本 祐子

鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く

埼玉 島貫 恵

一本の杭に分かれて春の水

愛知 古賀勇理央

日面へ出でし軽さに雪蛩

埼玉 野坂 潭

まなざしを遠くに花菜明りかな

東京 花房 礼子

にこにこと酷評を聞く初句会

静岡 野畑 明子

木の根開くダム湖を渡る風平ら

大阪 土田 善子

母の子でありし年月花の塵

東京 角宮しづか

宵節句金平糖は角で立つ

石川 澤田 静雄

童顔のまま古雛となられたり

岐阜 園 るみ子

兵庫 志々見久美

大串

章選

小川 輕舟選

島の子の海へこぎ出す半仙戯
王妃の名木札に残し薔薇枯るる
落花あび白寿近しと思ひをり
大西日墓仕舞ひして故郷捨つ
つれあひといふ言の葉のあたたかし
耳飾りはづし夜学の席に着く
白南風や海へ尽きたる滑走路
補助輪の取れ春風に突進す
見はるかす耀歌の嶺や春田打つ
母に夫吾に父なき敗戦日
青空や母の母校に入学す
大根引く父へ船笛鳴らしけり
草笛を覚え道草おぼえけり
燕来る湖上に白き音楽堂
燕来て空のかたさをほぐしけり
トンネルの先もトンネル山笑ふ
卒業の子よりも母の誇らしく
花吹雪正気狂気の中にある
草の絮飛んでひなたの残りけり
島を出る十五の春や銅鑼の音
税申告終へて安堵や春の月
四十年寡婦を通して葱きざむ

岡山 島村 博子
愛知 富田 範保
京都 西村 博子
大阪 瀬野 浩
東京 草野 准子
愛知 古賀勇理史
広島 坂本たか子
兵庫 公江 耀子
埼玉 高嶋 静
神奈川 相良 文雄
東京 下谷内綾子
神奈川 長浜よしこ
群馬 木下 涼薫
福岡 坂口 幸江
三重 村田 郁夫
北海道 成田 智子
広島 川手 和枝
千葉 小俣たか子
神奈川 緑川美世子
広島 藤谷 知子
東京 小林 黎子
栃木 橋本由紀子

炊き立ての新米稚のにはひせり
鵜籠編む竹ひるがへす小春かな
桜咲き村は昔をとりもどす
ぶら下がるだけの鉄棒鳥渡る
耕人のまづ一握の土を見る
九年母や墓を仕舞うて故山なし
遠洋の航海を終へ卒業す
差し潮のかがよふ島の雛流し
夕蟬や爪立ち外す忌中札
子どもらは湯気の塊冬至風呂
つちふるや暗くしづかに露人墓地
夕暮れのけだるき空や袋角
難民の手に囲まるる焚火かな
浮くたびに山昏れてゆくかいつぶり
鱈を揚げ長靴の父帰りけり
前髪の貼りつく額かき氷
大根引く父へ船笛鳴らしけり
虎杖を噛めば淋しさ遠くより
入籍のはがき一枚桃の花
鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く
父よりも大き靴穿き卒業す
鳥雲に入る消印の街遠し
紫木連ゆるき指輪をもてあそぶ

広島 渡里トモ枝
広島 坂本たか子
和歌山 保田 敏子
京都 池田 華甲
埼玉 中村 鈴子
山口 吉次 薫
福井 村田 浩
広島 坂本たか子
石川 榊谷 栄子
東京 相田 康子
福井 倉谷 紫龍
愛知 滝 典子
長崎 牛飼 瑞栄
富山 杉本 恵子
愛知 多田 三子
長野 中里とも子
神奈川 長浜よしこ
大阪 師岡 洋子
福島 武藤 主明
埼玉 島貫 恵
北海道 林 佑子
岐阜 森 瑞穂
埼玉 横田 幸子

小澤

實選

權

未知子選

食べて寝て遊んで食べて寝る子猫

東京 阿川 暢子

白南風や海へ尽きたる滑走路

広島 坂本たか子

春泥を飛び越え走者また走者

岐阜 廣瀬あや子

子燕の空の青さにまだ触れず

静岡 関口喜代子

搾乳機洗ひ清めて卒業す

神奈川 松下 宏民

鳥雲に入る消印の街遠し

岐阜 森 瑞穂

買初の珈琲豆とクロワッサン

東京 衣川 洋子

まくなぎの遊びに少し入れてもらふ

東京 土居ノ内寛子

雪溪を来て雲上の人となる

福井 藤田フジ子

風紋をくづして歩く跣足かな

愛知 藤本 恭子

折紙の鞍を置きたる茄子の馬

愛知 渡辺美智代

算盤の指生き生きと生身魂

京都 池田 華甲

ブカブカとオルガンの鳴り土筆出る

福岡 古賀 真理

春耕や妻に微かな力こぶ

愛知 河村 仁誠

耳飾りはづし夜学の席に着く

愛知 古賀勇理央

線量が分けるふるさと水温む

和歌山 田中 衡子

囀りや豚の御産の無事終る

長崎 高永 久子

青空の眩しさに解く懸想文

愛媛 岡本 千秋

櫛叩き春子の目覚め促せり

宮崎 伊藤 容子

児に譲る髪止めひとつ一葉忌

愛知 山本 光江

鱈を提げ長靴の父帰りけり

愛知 多田 三子

草々の勢ありけり鰯祭忌

広島 坂本たか子

固まりをほぐせば四匹の子猫

滋賀 小野 雅子

吊革に長短のあり鳥の恋

東京 小高 正子

前髪の貼りつく額かき氷

長野 中里とも子

靴紐を結べば草の芳しき

埼玉 松永 浮堂

並べ干す布巾の真白桜まじ

神奈川 山崎史保子

貨車の影重たき二百十日かな

埼玉 吉野真紀子

傷多き仏に朱熨供へけり

静岡 染葉三枝子

仕舞には消えて無くなる雪なれど

北海道 岩崎とし恵

名をもらひ居着く野良猫彼岸寺

福岡 尾籠 宏子

鳥賊を干す家ごとにある船着場

熊本 甲斐 文恵

をみなごの露被り来る日照雨かな

愛知 古賀勇理央

ごはごはと木綿の乾ぶ敗戦日

北海 道 岩崎とし恵

虹色のやがて空色しやばん玉

東京 花野 くゆ

土筆野へ開いてをりぬ非常ドア

鳥取 西村ゆうき

一本の杭に分かれて春の水

東京 花房 礼子

字と字つなぐ木の橋つばくらめ

青森 吉田千嘉子

春まけて平家の島の舟隠し

神奈川 奥田 君子

搾乳機洗ひ清めて卒業す

神奈川 松下 宏民

島を出る十五の春や銅鑼の音

広島 藤谷 知子

枕木にあはせる歩幅蝶の昼

大阪 池之 小町

亡き夫と選びし墓に詣でけり

東京 平野 征子

戦争を少し語りて毛糸編む

東京 小山 蓮子

角 谷 昌 子 選

加 古 宗 也 選

広島忌鉄柱の影濃かりけり

線量が分けるふるさと水温む

逃げ水を追うて一世を老いにけり

海苔舟の水脈に光の分かれゆく

鵜の嘴のしづく簪に光りけり

杼となりて雨の糸織る燕かな

天水の薄水を割り鉄洗ふ

原爆忌運河静かに日を流す

多喜二忌や石ころ多き畑を打つ

鉋毒の遙かな記憶野火走る

はばたきてあけぼの色や朱鷺の雛

耳飾りはづし夜学の席に着く

子どもらは湯気の塊冬至風呂

白球の泥にまみれて夏来たる

難民の手に囲まるる焚火かな

清明の風を通して暈拭く

子燕の空の青さにまだ触れず

遠山に雨残りたる水鶏かな

開けられぬオフィスの窓や鳥雲に

寒稽古終へて横切る爆心地

龍子の富士大観の不二春動く

花御堂羽根のきれいな鳥よぎる

月山に雪の来てゐる薪棚

母の日や母の幸せ妻に見る

早苗饗の仕上げ越中おわら節

土に生き土に生かされ麦を踏む

こんなにも足の大きく卒業す

雪溪を来て雲上の人となる

広島忌鉄柱の影濃かりけり

つれあひといふ言の葉のあたたかし

補助輪の取れ春風に突進す

ポケットのなかのさくらをつかみ出す

とんぼにはとんぼの空の高さあり

農小屋の開けつ放しの遅日かな

返したる平目に貌の無かりけり

冠雪の月山を背に村芝居

霊峰は雲の中なり遅桜

花を発ち花に戻れり観覧車

字と字つなぐ木の橋つばくらめ

薫風やサーカス小屋の組み上がり

手になじむ亀の子束子春惜しむ

穂の芽や軍手に残る棘一つ

クレソンの根方に軽き水の音

指笛を吹きて流星さそひ出す

山形 鈴木 あい

東京 三 界 峯

兵庫 長井 良孝

茨城 小山 千里

岡山 藤田 明子

福井 藤田フジ子

広島 坂本たか子

東京 草野 准子

兵庫 公江 耀子

愛知 梅田 昌孝

富山 脇坂琉美子

広島 新長 麗子

兵庫 瀬戸 幹三

大阪 三宅 崇代

東京 神戸 サト

京都 小原 緑

青森 吉田千嘉子

神奈川 月野木若菜

東京 松木 溪子

新潟 金子よし子

石川 今越みち子

東京 角宮しづか

片山 由美子 選

こんなにも立派な空家大ふぐり
 落の臺風に隠れてをりにけり
 部屋に礼言ひて退院朝さくら
 買初の珈琲豆とクロワッサン
 音といふ音を力に瀉落つる
 上げ潮の川の匂や地藏盆
 表札に残る子らの名つばくらめ
 メモになき鯛焼二つ買ひにけり
 みちのくの空の冥さや菊膾
 とんぼにはとんぼの空の高さあり
 秋風やたがひに違ふものを見て
 惜しみつつ今日をたたみぬ花衣
 石棺は舟の形やつくつくし
 そこにのみ日の当たりたる返り花
 青空の雲は動かずソーダ水
 三日月の形にたたむ紙風船
 シーサーの門に玉巻く芭蕉かな
 初風の渚に拾ふ水字貝
 薫風やサーカス小屋の組み上がり
 指切りの指に力や秋夕焼
 まなざしを遠くに花葉明りかな
 献立を考へてゐる蝶の昼

愛媛 野村タカ子
 大分 為成 央子
 東京 田村登代子
 東京 衣川 洋子
 埼玉 中島 みつ
 広島 坂本たか子
 愛知 大嶋 福代
 広島 池田 萩邨
 広島 坂本たか子
 富山 脇坂琉美子
 富山 脇坂琉美子
 富山 脇坂琉美子
 熊本 芥川 卓
 大阪 阪井 京子
 静岡 大平 悦子
 岡山 磨家 泉
 神奈川 乗田眞紀子
 沖繩 筒井 慶夏
 神奈川 月野木若菜
 静岡 荻野加壽子
 大阪 土田 善子
 東京 曽根新五郎

栗田 やすし 選

父母眠る被曝の丘やかげろへる
 十二月八日しづかに拭ふ老眼鏡
 枯葉落つふつと力を抜くやうに
 廃校の校長室に春子楳
 浜に立ち波の音聴く震災忌
 喪の明けて独り波聞く端居かな
 金魚買ひ水の重さを持ち歩く
 耳飾りはづし夜学の席に着く
 表札に残る子らの名つばくらめ
 昭和の日チキンライスに国旗立て
 白魚の透ける命を見て倦かず
 一病を神に委ねて土筆摘む
 浮くたびに山昏れてゆくかいつぶり
 画紙へ置く墨のかをりや春の雪
 うりずんや蒲葵の葉で編む子の玩具
 燕来て空のかたさをほぐしけり
 鵜籠編む竹ひるがへす小春かな
 冠雪の月山を背に村芝居
 沖繩忌母に老いの日なかりけり
 探梅や風は刃物のごと矢り
 落花あび白寿近しと思ひをり
 対岸に灯の入る頃や合歡の花

長崎 小谷 一夫
 東京 天野みつ子
 神奈川 喜多村純子
 東京 西尾 智美
 栃木 西里満喜子
 東京 金谷 洋次
 東京 関戸 信治
 愛知 古賀勇理央
 愛知 大嶋 福代
 岐阜 森 佳子
 奈良 小島 元博
 三重 国枝 洋子
 富山 杉本 恵子
 東京 丸山ゆき子
 沖繩 西原 洋子
 三重 村田 郁夫
 広島 坂本たか子
 大阪 三宅 崇代
 沖繩 宮城 勉
 島根 足立 歩久
 京都 西村 博子
 新潟 熊谷 國男

古賀

雪江選

小島

健選

ただそこに立つために訪ふ爆心地

大阪 今井 文雄

遠き日をまあるく抱いて日向ぼこ

東京 関戸 信治

上げ潮の川の句や地藏盆

広島 坂本たか子

返したる平目に貌の無かりけり

兵庫 瀬戸 幹三

能登半島海へ海へと田水張る

東京 内田 廣二

獣医来てまづは牛虻払ひけり

静岡 中川 正男

白息の間ひ白息でかへしけり

埼玉 三浦 恭

初雪の白山をすゑ日本晴

石川 前田 時余

同じ耳三代揃ふ彼岸寺

広島 中村 文子

来し方の如く二人で麦踏み

東京 鈴木三光子

大根引く父へ船笛鳴らしけり

神奈川 長浜よしこ

廃校の校長室に春子楳

東京 西尾 智美

島太鼓打つて島の子卒業す

岡山 宮本いずみ

ただそこに立つために訪ふ爆心地

大阪 今井 文雄

鷺の巢を見上ぐる知らぬ者同士

愛知 光田 道子

捨て雪の山の陰なる蒼さかな

北海道 宮田春夢子

落の臺ばかりの魚籠を覗かるる

大阪 藤岡 満

流し雛一縷の水も濁さざる

大分 岩波千代美

ゐのこづち取りつつ講話聞いてをり

静岡 渥美 絹代

耳飾りはづし夜学の席に着く

愛知 古賀勇理央

草の絮飛んでひなたの残りけり

神奈川 緑川美世子

校庭は子らをこぼさず青田風

兵庫 千鳥 由貴

大夏日船は腹より水吐けり

広島 坂本たか子

秋風やたがひに違ふものを見て

富山 脇坂琉美子

浮くたびに山昏れてゆくかいつぶり

富山 杉本 恵子

梢叩き春子の目覚め促せり

宮崎 伊藤 容子

六月の沖縄静かなる怒濤

広島 飯野 幸雄

原爆忌指一本で開く傘

千葉 梅津 紀子

金魚買ひ水の重さを持ち歩く

東京 関戸 信治

燕来る湖上に白き音楽堂

福岡 坂口 幸江

若鮎やひかりは水の影となり

愛媛 江崎紀和子

あいの風髪の芯まで故郷なり

東京 小林 千草

躑づきし土やはらかき諸葛菜

静岡 太田絵津子

秋風やひらひらと来る白き猫

東京 小勢 ゆり

夏芝居影絵のやうに始まりぬ

東京 浦田 祐子

鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く

京都 能勢 恵

指切りの指に力や秋夕焼

静岡 荻野加壽子

搾乳機洗ひ清めて卒業す

埼玉 島貫 恵

十二月八日しづかに拭ふ老眼鏡

東京 天野みつ子

木に籠る鳥の身じろぐ良夜かな

神奈川 松下 宏民

組ねぶた灯の入りたる龍の髭

大阪 今井 文雄

にこにこ酷評を聞く初句会

埼玉 野坂 潭

落の臺風に隠れてをりにけり

大分 為成 央子

静岡 野畑 明子

佐怒賀 直 美 選

嶋 田 麻 紀 選

金魚買ひ水の重さを持ち歩く
大夏日船は腹より水吐けり
背負ふ子に若布にぎらせ若布干す
鵜の嘴のしづく簪に光りけり

東京 関戸 信治
広島 坂本たか子
神奈川 長浜よしこ
広島 坂本たか子

啓蟄や買はずに出づる地下の書肆
薄氷のみづとなりゆくひとところ
鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く
ただそこに立つたために訪ふ爆心地

岡山 脇本 妙
静岡 佐藤 升子
埼玉 島貫 恵
大阪 今井 文雄

虹のあとひとりふたりと野良に出る
上げ潮の川の匂や地藏盆
魚鼓を打つ春の光を打ち据ゑて
夕蟬や爪立ち外す忌中札
子どもらは湯気の塊冬至風呂
連風の先鋒雲に喰らひつく

東京 小泉 良子
広島 坂本たか子
愛知 西尾桃太郎
石川 榊谷 栄子
東京 相田 康子
神奈川 衛藤 佳也

多喜二忌や石ころ多き畑を打つ
うす紙を解けば魂入る御殿雛
十指みな使ひ尽くして蟹しゃぶる
春泥を飛び越え走者また走者
じやんけんにはあを出す癪熱帯夜
夏芝居影絵のやうに始まりぬ
久に会ふ人みな優し葦草
亀鳴くを待ったつぎの身ほとりに

岐阜 三輪 洋路
愛知 岩田 芳雄
富山 寺田 嶺子
岐阜 廣瀬あや子
千葉 小橋 すみ
東京 浦田 祐子
千葉 中川 素子
福岡 上村 恵翠
静岡 岩崎 武士
大阪 阪井 京子
富山 杉本 恵子
長野 中里とも子
神奈川 長浜よしこ
和歌山 宮本 啓子
青森 佐々木雅翔
青森 小野 寿子
秋田 岸部 吟遊
愛知 古賀勇理央

三尺の水柱はらひて棺出づ
難民の手に囲まるる焚火かな
門前に大福を買ふ傀儡師
ひとりとはもう減らぬこと蜆汁
吊橋を螢の国へ渡りけり
鵜籠編む竹ひるがへす小春かな
籐の束水に漬けおく日永かな
鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く
螻蛄鳴くや村の舞台の土間奈落
十葉の庭から上る生家かな
櫓で渡る島の畑や春日和

新潟 小黒 音楽
長崎 牛飼 瑞栄
新潟 山本 武子
大分 富川 元女
群馬 木下 涼薫
広島 坂本たか子
栃木 緑川 啓子
埼玉 島貫 恵
長野 北川みや子
宮城 鈴木 勝也
三重 森脇 恒夫

五つ玉弾きしやんしやん新茶競る
そここのみ日の当たりたる返り花
浮くたびに山昏れてゆくかいつぶり
前髪の貼りつく額かき水
背負ふ子に若布にぎらせ若布干す
ひと吹きが幸せの数しやぼん玉
藍壺に深まる藍や鳥渡る
ごくごくと飲む耕しのあとの水
研ぎ屋来てひかりを増やす百千鳥
花筵まづ真ん中へ嬰這はす

千葉 中川 素子
福岡 上村 恵翠
静岡 岩崎 武士
大阪 阪井 京子
富山 杉本 恵子
長野 中里とも子
神奈川 長浜よしこ
和歌山 宮本 啓子
青森 佐々木雅翔
青森 小野 寿子
秋田 岸部 吟遊
愛知 古賀勇理央

白濱一羊選

鈴木

しげを選

ひとつでは寂しきものに風車
 ふらここや押せば遠のく子の背中
 シュラフより顔出して待つ流星群
 つちふるや柩これほど軽きとは
 凍蝶の陶片と化す大地かな
 ぶら下がるだけの鉄棒鳥渡る
 唐辛子吊つてますます頑固かな
 大鍋に火の粉飛び込む芋煮会
 金魚買ひ水の重さを持ち歩く
 長閑しや小突けば動き出す玩具
 春泥を飛び越え走者また走者
 子どもらは湯気の塊冬至風呂
 ほっとけば直る仲なり衣被
 メモになき鯛焼二つ買ひにけり
 惜春やはらりと落つる本の帯
 難民の手に囲まるる焚火かな
 レコードに針のつぶやき花の雨
 前髪の貼りつく額かき氷
 逆引きの辞典を捲る三鬼の忌
 膝ついてしまへば本気潮干狩
 花筵まづ真ん中へ嬰這はす
 電波時計ぐるぐるエープリル・フル

大阪 西田 洋
 京都 横滝 友子
 岐阜 直井 照男
 福岡 篠原 敬祐
 東京 坂内 時子
 京都 池田 華甲
 神奈川 倉谷 安子
 東京 佐藤 孝志
 東京 関戸 信治
 茨城 坂場 俊仁
 岐阜 廣瀬あや子
 東京 相田 康子
 新潟 高埜 健蔵
 広島 池田 萩邨
 大阪 山本そよ女
 長崎 牛飼 瑞栄
 静岡 河江 昌子
 長野 中里とも子
 岡山 岡田 邦男
 宮崎 飯干 久子
 愛知 古賀勇理央
 富山 磯田 和子

大根引く父へ船笛鳴らしけり
 角伐の枕の土を払ひけり
 今川焼頬にもあてて家路かな
 水甕を置く囀のどまんなか
 固まりをほぐせば四匹の子猫
 入寮の荷物少なし初桜
 捨て浮標に残る潮の香花大根
 風船を持たせて百日祝かな
 逃げ水を追うて一世を老いにけり
 鶉籠編む竹ひるがへす小春かな
 をみなごの落被り来る日照雨かな
 先生の最終講義春の雪
 入籍のはがき一枚桃の花
 雪女夜ごとこきりこ聴きにくる
 鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く
 ゐのこづち取りつつ講話聞いてをり
 豚五頭荷台に二百十日かな
 草の絮飛んでひなたの残りけり
 雷鳥や飯盒返す雲の上
 飛花落花飛花落花してひと日かな
 櫓で渡る島の畑や春日和
 町の名の榎の大樹芽吹きたる
 亡き夫と選びし墓に詣でけり

神奈川 長浜よしこ
 神奈川 倉谷 安子
 東京 松原 吉信
 北海道 大澤 久子
 滋賀 小野 雅子
 東京 鶴巻貴代美
 東京 市村 栄理
 福岡 坂口 幸江
 東京 竹内 柳影
 広島 坂本たか子
 愛知 古賀勇理央
 東京 市村 和湖
 福島 武藤 主明
 千葉 鈴木 和子
 埼玉 島貫 恵
 静岡 渥美 絹代
 静岡 渥美 絹代
 神奈川 緑川美世子
 神奈川 千葉 喬子
 青森 新井山雅行
 三重 森脇 恒夫
 大阪 西村 妙子
 東京 平野 征子

代替りせし顔ばかり農具市
袋掛梯子の影の消ゆるまで
折紙の鞍を置きたる茄子の馬
天水の薄水を割り鍬洗ふ
糝糸とりし制服桜餅
水際の風立つところ花筏
うす紙を解けば魂入る御殿雛
石蓴苳り肩に食い込む籠の紐
金魚買ひ水の重さを持ち歩く
紙漉くや先づ荒神に神酒ささげ
堰越えてゆつくり結ぶ花筏
病む母に最後の嘘をつく霜夜
梅東風や更地に残る古井筒
惜春やはらりと落つる本の帯
土竜塚五つ六つ踏み梅探る
靴紐を結べば草の芳しき
啓蟄や親の遺影に似てきたる
並べ干す布巾の真白桜まじ
潮引いて石蓴ひたひた帯をなす
籐の束水に漬けおく日永かな
漁り火の増ゆる八十八夜かな
青空へ銕を入れて剪定す

富山 中坪 達哉
青森 田端 千鼓
愛知 渡辺美智代
三重 宇田多香子
岡山 池田 純子
栃木 森 ふく
愛知 岩田 芳雄
沖繩 當間タケ子
東京 関戸 信治
広島 坂本たか子
大分 溝野智寿子
千葉 榎本聖游子
兵庫 田中 愛子
大阪 山本そよ女
愛知 光田 道子
埼玉 松永 浮堂
大阪 大島 幸男
神奈川 山崎史保子
広島 波多野千鶴子
栃木 緑川 啓子
岩手 木関 偕楽
岐阜 園 るみ子

石鹼玉吹く子に出発の時間
能登半島海へ海へと田水張る
苗札に子の嫁ぐ日を記しをり
顔ぶれの変らぬ村の焚火の輪
笹鳴の笹をつたひて途切れざる
金魚買ひ水の重さを持ち歩く
紙漉くや先づ荒神に神酒ささげ
黙禱の球場に聴く秋の蟬
夕蟬や爪立ち外す忌中札
兜太忌に生まれし子豚藁で拭く
炎ごと倒れ出したるどんだかな
太陽は大したものだ大根干す
路の臺ばかりの魚籠を覗かるる
校庭は子らをこぼさず青田風
天辺に捨てられし田や田螺鳴く
南溟の兜太のやうな雲の峰
一病を神に委ねて土筆摘む
世界史の窓から平らかなるプール
ひとつでは寂しきものに風車
はれ烏賊とバケツに貰ふ島暮し
ふらここに座して死に方考へる

京都 徳永 真弓
東京 内田 廣二
埼玉 本庄 康代
埼玉 松代 忠博
東京 真隅 素子
東京 関戸 信治
広島 坂本たか子
神奈川 高野 信一
石川 榊谷 栄子
埼玉 武藤 三山
新潟 小林 純子
宮崎 松岡 美子
大阪 藤岡 満
兵庫 千鳥 由貴
新潟 小黒 音榮
長崎 牛飼 瑞榮
三重 国枝 洋子
東京 嶋田 伸子
大阪 西田 洋
東京 影山十二香
広島 野間しげる

咳の夜の背中に母の手の記憶

徳田 千鶴子 選

茨城 宮丸千恵子

中坪 達哉 選

贅沢の出来ぬ母ゐて終戦忌

獅子舞の口から昭和覗きをり

溽暑かな牛舎の隅の塩の桶

音といふ音を力に滝落つる

唐辛子吊つてますます頑固かな

耕人のまづ一握の土を見る

実よりも虚のおもしろき瓢かな

岩を打つ水は饒舌猫やなぎ

表札に考生きてゐる帰省かな

百歳と隣合せの薬喰

伏せて待つ盲導犬に花吹雪

膝ついてしまへば本気潮干狩

虎杖を噛めば淋しさ遠くより

父いまだ旅に在ること星月夜

搾乳機洗ひ清めて卒業す

さみしさの身をうらがへし泳ぎけり

春炬燵幸せそうな愚痴を聞き

目刺焼くなんだと連添うて

木洩れ日のひとつひらひら蝶となり

思ひ出のへこみしままの夏帽子

東京 曾根新五郎

仕舞湯の菖蒲でみがく踵かな
表札に考生きてゐる帰省かな

鳥取 玉井 瑛子

菜の花の眩しき道を兄見舞ふ

貝寄風や古地図のままの町歩む

梅真白父に終りし丘の畑

一打ごと心身はぐす春の畑

国境の島へマフラー巻き直す

花野行く夕日に近きところまで

前髪の貼りつく額かき氷

吊橋を螢の国へ渡りけり

金堂の裏戸つくるひ松の芯

父帰る家の中まで霧連れて

伝言板今もある駅鳥雲に

袋掛梯子の影の消ゆるまで

しばらくは一人が愉し大花野

木に籠る鳥の身じろぐ良夜かな

ゐのこづち取りつつ講話聞いてをり

石嶮玉吹く子に出発の時間

十葉の庭から上る生家かな

鳥雲に入る消印の街遠し

亡き夫と選びし墓に詣でけり

ふらここに座して死に方考へる

東京 萩原まさこ

広島 野間しげる

千葉 榎本聖游子

愛知 富田 範保

広島 小林 洋子

青森 葛西 行雄

三重 山中 悦子

京都 蓮井いく子

長野 中里とも子

群馬 木下 涼薫

広島 坂本たか子

神奈川 梅津 大八

千葉 工藤 文子

青森 田端 千鼓

埼玉 梅田ひろし

埼玉 野坂 潭

静岡 渥美 絹代

京都 徳永 真弓

宮城 鈴木 勝也

岐阜 森 瑞穂

東京 平野 征子

広島 野間しげる

固まりをほぐせば四匹の子猫
中原 夫 選
滋賀 小野 雅子

仲 村 青 彦 選

出来たての紺おし出して牽牛花
畳針刺されしままに寒明くる
降ればまづ昨日が匂ふ野焼かな
つれあひといふ言の葉のあたかし
みな力出し合つてゐる物芽かな
ソの字の手ハの字の足や阿波踊
銃眼に蜘蛛が罫を張りゐたりけり
ほっとけば直る伸なり衣被
太陽は大したものだ大根干す
ボロ市の店主隣へ入り浸り
つもるだけつもればしづか雪下す
停年のブランコ囑託のベンチ
背負ふ子に若布にぎらせ若布干す
ひとりとはもう減らぬこと蜆汁
待つといふ長閑さのあり昼の酒
膝ついてしまへば本気潮干狩
再びといふ今日はなし初桜
ひと吹きが幸せの数しやぼん玉
一本の杭に分かれて春の水
さみしさの身をうらがへし泳ぎけり

富山 荒田眞智子
北海道 林 直子
岐阜 福井 英敏
東京 草野 准子
北海道 大谷 博光
東京 齊藤 保志
広島 坂本たか子
新潟 高埜 健蔵
宮崎 松岡 美子
奈良 堀上 慶子
新潟 小黒 音楽
栃木 直寛 青析
神奈川 長浜よしこ
大分 富川 元女
神奈川 岩下 正文
宮崎 飯干 久子
福岡 塩川 隆三
和歌山 宮本 啓子
東京 花房 礼子
大阪 檜崎美和子

揃ふまで言葉つつしむ雑煮の座
亡き夫と選びし墓に詣でけり
歌垣の山懐の初音かな
カウベルの音の風来る夏野かな
寄せ書はあの子のとなり卒業歌
天辺に捨てられし田や田螺鳴く
夕暮れのけだるき空や袋角
惜しみつつ今日をたたみぬ花衣
靴紐を結べば草の芳しき
青空の雲は動かずソーダ水
夏芝居影絵のやうに始まりぬ
差し潮の夕日に染むる石蓴浜
あいの風髪 of 芯まで故郷なり
名をもらひ居着く野良猫彼岸寺
北に生き北しか知らず畑を打つ
三日月の形にたたむ紙風船
ごくごくと飲む耕しのあとの水
もの音のふと途絶えたる寒さかな
虹色のやがて空色しやぼん玉
子規庵の庭のをちこち蚊遣香
北窓を開き一輪挿しを置く
春耕に体の慣れしきのふけふ

島根 足立 歩久
東京 平野 征子
千葉 佐々木リサ
神奈川 井手 浩堂
東京 山下 清実
新潟 小黒 音楽
愛知 滝 典子
富山 脇坂琉美子
埼玉 松永 浮堂
静岡 大平 悦子
東京 浦田 祐子
沖縄 西原 洋子
東京 小林 千草
福岡 尾籠 宏子
北海道 伊藤 やす
岡山 磨家 泉
青森 小野 寿子
三重 山田 良一
東京 花野 くゆ
東京 石井 光子
東京 大西まりゑ
新潟 清水 恵子

西村和子選

西山

睦選

代替りせし顔ばかり農具市

富山 中坪 達哉

流し雛一縷の水も濁さざる

大分 岩波千代美

路の臺ばかりの魚籠を覗かるる

大阪 藤岡 満

金魚買ひ水の重さを持ち歩く

東京 関戸 信治

嶺ざくらなだれなだれて熊野灘

三重 稲垣いつを

桃咲くや乳房を離し嬰ねむる

愛知 南崎 文代

能登半島海へ海へと田水張る

東京 内田 廣二

仕舞湯の菖蒲でみがく踵かな

鳥取 玉井 瑛子

図らずも嵯峨念仏の鉦の音

三重 岩脇 五風

廃校の校長室に春子櫛

東京 西尾 智美

耕人のまづ一握の土を見る

埼玉 中村 鈴子

ましら酒山が重たくなりけり

埼玉 鈴木 恭子

紙漉くや先づ荒神に神酒ささげ

広島 坂本たか子

流木に光置きある冬の蝶

東京 齊藤 保志

黙禱の球場に聴く秋の蟬

神奈川 高野 信一

春泥を飛び越え走者また走者

岐阜 廣瀬あや子

連風の先鋒雲に喰らひつく

神奈川 衛藤 佳也

粃筵太平洋に耳揃へ

大阪 小畑 晴子

三尺の氷柱はらひて棺出づ

新潟 小黒 音楽

こんなにも立派な空家犬ふぐり

愛媛 野村タカ子

紫木蓮内に秘めたる象牙色

埼玉 松永 浮堂

母に夫吾に父なき敗戦日

神奈川 相良 文雄

清明の風を通して暈拭く

愛知 林 尉江

花野行く夕日に近きところまで

京都 蓮井いく子

雪を搔くひとりの時間使ひ切り

岡山 岡田 邦男

背負ふ子に若布にぎらせ若布干す

神奈川 長浜よしこ

荒海のけふ晴れわたる桜鯛

富山 新村美那子

荒海のけふ晴れわたる桜鯛

富山 新村美那子

草笛を覚え道草おぼえけり

群馬 木下 涼薫

風船を売る拳よりひとつ抜き

愛知 篠田 篤

秋あかね雲低ければ低く飛ぶ

広島 坂本たか子

水切の親子を見遣る遍路笠

埼玉 松坂 昌幸

寄せ書きは君の隣に卒業す

大阪 和田 恵子

茎立や老はときをり体操す

三重 池田 緑人

鳥賊を干す家ごとにある船着場

大阪 吉田 喬

ほととぎす木の香をとばす船大工

岐阜 寺松美代子

焼杉の木目浮き立つ時正かな

大阪 角野 京子

鳥雲に入る消印の街遠し

岐阜 森 瑞穂

庭隅の石臼が好き蜥蜴の子

埼玉 眞下 杏子

壺焼の螺旋のからだ引き出せり

東京 中島悠美子

クッキーの缶に折紙立子の忌

東京 小池 博美

枯葉落つふつと力を抜くやうに

神奈川 喜多村純子

野中亮介選

能村研三選

扇閉ぢ己も閉ぢてしまひけり
仕舞には消えて無くなる雪なれど
こんにやくと言へば上州針供養
こんなにも足の大きく卒業す
廃校の校長室に春子櫛
ましら酒山が重たくなりけり
広島忌鉄柱の影濃かりけり
水甕を置く罇のどまんなか
大鍋に火の粉飛び込む芋煮会
線量が分けるふるさと水温む
まづ縮み尺蠖尺を取りはじめ
紙一枚めくれれば明日あたたかし
靴紐を結べば草の芳しき
固まりをほぐせば四匹の子猫
ひとりとはもう減らぬこと蜆汁
草笛を覚え道草おぼえけり
膝ついてしまへば本気潮干狩
ひろしま忌橋の下には橋の影
獣医来てまづは牛虻払ひけり
歌留多読む恋の歌とは知らぬ子へ
色のなき戦の展示花の昼
童顔のまま古雛となられたり

千葉 福井 隆子
北海道 岩崎とし恵
神奈川 甲斐 輝子
岡山 藤田 明子
東京 西尾 智美
埼玉 鈴木 恭子
広島 坂本たか子
北海道 大澤 久子
東京 佐藤 孝志
和歌山 田中 衡子
神奈川 高橋 眞也
愛知 古藤 欣也
埼玉 松永 浮堂
滋賀 小野 雅子
大分 富川 元女
群馬 木下 涼薫
宮崎 飯干 久子
広島 坂本たか子
静岡 中川 正男
石川 松原かほる
東京 大林 和代
岐阜 園 るみ子

夏芝居影絵のやうに始まりぬ
花吹雪正気狂気の中にある
音といふ音を力に滝落つる
実よりも虚のおもしろき瓢かな
差し潮のががよふ島の雛流し
流し雛一縷の水も濁さざる
熱燗やこころの熾をかき立たせ
紫木蓮内に秘めたる象牙色
振り向けば一木となり雪女郎
浮くたびに山昏れてゆくかいつぶり
水よりも透け白魚の隠れけり
再びといふ今日はなし初桜
思ひ出を手放すやうに花の散る
水鏡柳瑞々しきあした
虹色のやがて空色しやぼん玉
さみしさの身をうらがへし泳ぎけり
ふるさとの山は濡れ色春の月
朝ざくら淡き湯気立つ集乳缶
あらたまのあはうみ金波銀波かな
若鮎やひかりは水の影となり
霞着て連山はなほ耀歌の地

千葉 小俣たか子
埼玉 中島 みつ
大阪 守作けい子
広島 坂本たか子
大分 岩波千代美
和歌山 長谷川閑乙
埼玉 松永 浮堂
神奈川 宮崎登美子
富山 杉本 恵子
三重 西尾 敬一
福岡 塩川 隆三
大分 押谷 隆
千葉 箕輪カオル
東京 花野 くゆ
大阪 檜崎美和子
兵庫 秋山 薫
静岡 間島あきら
東京 小山 博子
愛媛 江崎紀和子
神奈川 小林ひろこ

墓目良雨選

福永法弘選

耳飾りはつし夜学の席に着く

愛知 古賀勇理史

ほっとけば直る仲なり衣被

新潟 高埜 健蔵

十葉の庭から上る生家かな

宮城 鈴木 勝也

国境の島へマフラー巻き直す

三重 山中 悦子

思ひ出のへこみしままの夏帽子

東京 曾根新五郎

世界史の窓から平らかなるプール

東京 嶋田 伸子

こんなにも足の大きく卒業す

岡山 藤田 明子

顔ぶれの変らぬ村の焚火の輪

埼玉 松代 忠博

遠洋の航海を終へ卒業す

福井 村田 浩

田の隅に風の寄り道余り苗

鳥取 玉井 瑛子

目玉焼ぶると合格通知来る

島根 江角 純子

廃校の校長室に春子櫓

東京 西尾 智美

よろづ屋の日除がバスの待合所

東京 金谷 洋次

代替りせし顔ばかり農具市

富山 中坪 達哉

秋風やたがひに違ふものを見て

富山 脇坂琉美子

歌垣の山懐の初音かな

千葉 佐々木リサ

固まりをほぐせば四匹の子猫

滋賀 小野 雅子

表札に残る子らの名つばくらめ

愛知 大嶋 福代

伏せて待つ盲導犬に花吹雪

岡山 岡田 邦男

白南風や海へ尽きたる滑走路

広島 坂本たか子

里山のづきづき青む五月かな

岐阜 七種 年男

ままごとのやうに雛を飾りけり

北海道 北瀬むつき

遠山に雨残りたる水鶏かな

広島 坂本たか子

メモになき鯛焼二つ買ひにけり

広島 池田 萩邨

寄せ書きは君の隣に卒業す

大阪 和田 恵子

ボロ市の店主隣へ入り浸り

奈良 堀上 慶子

蝶結び出来て駆けだす春の靴

石川 前 九疑

難民の手に囲まるる焚火かな

長崎 牛飼 瑞栄

搾乳機洗ひ清めて卒業す

神奈川 松下 宏民

浮くたびに山昏れてゆくかいつぶり

富山 杉本 恵子

昭和の日スキミルクのドラム缶

神奈川 正木 勝

昼月の色に仕上がる蒸蝶

京都 大谷 昌子

水温む草に転がすランドセル

神奈川 千葉 喬子

亀鳴くや行けたら行くといふ返事

大分 富川 元女

翔びたてる子雀源氏物語

京都 佐々木志う

吹き溜まる杉の葉屑に落し角

京都 谷田明日香

母さんの椅子で父さん日向ぼこ

大分 重石多鶴子

上り鮎四十十川を選びけり

高知 藤原佳代子

目刺焼くなんだと連添うて

青森 鈴木志美恵

ひとつでは寂しきものに風車

大阪 西田 洋

父は吾を君づけで呼ぶ竜の玉

東京 乙幡千枝実

朝ざくら淡き湯気立つ集乳缶

静岡 間島あきら

徘徊の母を襦袢に包み込む

福井 川田 邦子

連翹の跳ぬる一枝を活けあぐむ

東京 星野猪久子

東京 平野 征子

亡き夫と選びし墓に詣でけり

東京 平野 征子

藤 本 美和子 選

ただそこに立つために訪ふ爆心地
メモになき鯛焼二つ買ひにけり

大阪 今井 文雄
広島 池田 萩邨

松 尾 隆 信 選

メモになき鯛焼二つ買ひにけり

広島 池田 萩邨

赤海鼠赤黄男と語りたき酒よ

和歌山 倉田 信司

角伐の枕の土を払ひけり

神奈川 倉谷 安子

男三瓶より日照雨のきたる花野かな

広島 坂本たか子

鵜の嘴のしづく簪に光りけり

広島 坂本たか子

上げ潮の川の匂や地藏盆

広島 坂本たか子

堰越えてゆつくり結ぶ花筏

大分 溝野智寿子

青空の雲は動かずソーダ水

静岡 大平 悦子

青空や母の母校に入学す

東京 下谷内綾子

猿山のボスと目の合ふ花の昼

東京 堀井より子

ひろしま忌橋の下には橋の影

広島 坂本たか子

亡き人の分も米研ぐ彼岸かな

千葉 塩野谷慎吾

鶯の声に御籤を結びにけり

秋田 丹野 剛紀

長考の棋士の一手や花は葉に

大分 富尾 和恵

昭和の日柱時計の昭和の音

和歌山 佐戸 律子

花を発ち花に戻れり観覧車

京都 小原 緑

城垣に遊び石ありすみれ草

東京 倉林 美保

春かたまけて起き抜けの白湯甘し

静岡 神田美穂子

ゐのこづち取りつつ講話聞いてをり

静岡 渥美 絹代

水桶の貝が水吐く入彼岸

和歌山 池田 光子

連翹の跳ぬる一枝を活けあぐむ

東京 星野猪久子

花御堂羽根のきれいな鳥よぎる

静岡 渥美 絹代

まくなぎの遊びに少し入れてもらふ

東京 土居ノ内寛子

水甕を置く轉のどまんなか

北海道 大澤 久子

子を背負ひふらこの子の背を押せり

埼玉 須賀 遊子

大仏の太足に群れ初雀

千葉 小俣たか子

ほっとけば直る仲なり衣被

新潟 高埜 健蔵

湯たんぼの畳ぬくめてゐたりけり

福岡 福田 隆

清明の風を通して畳拭く

愛知 林 尉江

お風呂場の溢れる「あのね」子どもの日

千葉 四季春茶子

あいの風髪の芯まで故郷なり

東京 小林 千草

円位忌の浜の小石は花の色

東京 本多 遊子

ごくごくと飲む耕しのあとの水

青森 小野 寿子

桃咲くや乳房を離し嬰ねむる

愛知 南崎 文代

山笑ふ後ろの正面は誰

福井 橋本 芳夫

寒紅やバリ留字を決意して

大阪 山内 繭彦

嶺ざくらなだれなだれて熊野灘

三重 稲垣いつを

翔びたてる子雀源氏物語

京都 佐々木志う

置き去りの蜥蜴の尻尾大地打つ

鹿児島 窪見 れい

夜桜やオール収めてたゆたへり

大阪 新谷 壯夫

連翹の跳ぬる一枝を活けあぐむ

東京 星野猪久子

壺焼の螺旋のからだ引き出せり

東京 中島悠美子

ここからは原発敷地いぬふぐり
松岡隆子選
香川 島田 章平

南
うみを選

中継地からも蟬声黙禱す

鳥雲に入る消印の街遠し

三番も月山讀ふ卒業歌

茶摘女の夜は音読の宇治十帖

入籍のはがき一枚桃の花

よろづ屋の日除がバスの待合所

耕人のまづ一握の土を見る

草笛を覚え道草おぼえけり

白粥はひと日で飽きて春の風邪

北窓を開き一輪挿しを置く

メモになき鯛焼二つ買ひにけり

六月の沖縄静かなる怒濤

寒稽古終へて横切る爆心地

山笑う兜太句碑から飛び出す子

逃げ水を追うて一世を老いにけり

にこにここ酷評を聞く初句会

春の宵遅く帰ると言つてある

囀りや鞆の中の着信音

クッキーの缶に折紙立子の忌

嘘少しついて帰りぬおぼろ月

涸川へ護岸工事の土崩る

東京 大石香代子
岐草 森 瑞穂
山形 鈴木 正子
兵庫 草刈 朝男
福島 武藤 主明
東京 金谷 洋次
埼玉 中村 鈴子
群馬 木下 涼薫
東京 佐藤 孝志
東京 大西まりゑ
広島 池田 萩邨
広島 飯野 幸雄
広島 小都 妙子
埼玉 横田 信江
東京 竹内 柳影
静岡 野畑 明子
愛知 奥平ひかる
青森 中谷 恭子
東京 小池 博美
埼玉 瀬川 節子
埼玉 田口 武

この場より出撃せしと花菜揺る
桜鯛しばし包丁動かざる
つちふるや柩これほど軽きとは
角伐の枕の土を払ひけり
鵜の嘴のしづく簪に光りけり
みな力出し合つてゐる物芽かな
兜太忌に生まれし子豚藁で拭く
あどを打ち先を促す団扇風
露の臺ばかりの魚籠を覗かる
草々の勢ありけり獺祭忌
百歳と隣合せの薬喰
青柳の風はなすときなかりけり
逃げ水を追うて一世を老いにけり
獣医来てまづは牛虻払ひけり
花を発ち花に戻れり観覧車
搾乳機洗ひ清めて卒業す
揃ふまで言葉つつしむ雑煮の座
北窓を開き一輪挿しを置く
ゐのこづち取りつつ講話聞いてをり
寛解とふ慎ましき語や青き踏む
日向ほこ人であること薄れゆく
草刈りて土手の日差しを均しけり

山口 島津 教恵
東京 中村 我人
福岡 篠原 敬祐
神奈川 倉谷 安子
広島 坂本たか子
北海道 大谷 博光
埼玉 武藤 三山
神奈川 岸本 圭舟
大阪 藤岡 満
広島 坂本たか子
新潟 小黒 音榮
三重 古川 和子
東京 竹内 柳影
静岡 中川 正男
京都 小原 緑
神奈川 松下 宏民
島根 足立 歩久
東京 大西まりゑ
静岡 渥美 絹代
新潟 曾我 啓子
石川 國田 欽也
東京 田村登代子

三村純也選

吊橋を螢の国へ渡りけり
 よろづ屋の日除がバスの待合所
 亀鳴くや行けたら行くといふ返事
 つまづきし石に声あり冬の坂
 風や歳月友を減らしゆく
 表札に考生きてゐる帰省かな
 正門の桜を残し廃校す
 伏せて待つ盲導犬に花吹雪
 狢犬を撫でゐて受験生らしき
 上り鮎四十川を選びけり
 豊神酒を積みて始まる里神楽
 再びといふ今日はなし初桜
 狐火やもと来た道へ迷ひ出て
 伝言板今もある駅鳥雲に
 シーサーの門に玉巻く芭蕉かな
 入籍のはがき一枚桃の花
 沖合に二百十日の巡視船
 母の日や母ならぬ身に花届く
 着ぶくれて移動スーパ―待つ米寿
 雷鳥や飯盆返す雲の上
 目刺焼くなんだかんだと連添うて
 童顔のまま古雛となられたり
 亡き夫と選びし墓に詣でけり

群馬 木下 涼薫
 東京 金谷 洋次
 大分 富川 元女
 栃木 郡司恵美子
 奈良 田村 英一
 千葉 榎本聖游子
 奈良 長谷川紀美子
 岡山 岡田 邦男
 北海道 伊藤 黎
 高知 藤原佳代子
 島根 小澤 巖
 福岡 塩川 隆三
 東京 木塚 眞人
 千葉 工藤 文子
 神奈川 乗田眞紀子
 福島 武藤 主明
 東京 弾塚 直子
 富山 畠山 美苗
 愛知 近藤 和子
 神奈川 千葉 喬子
 青森 鈴木志美恵
 岐阜 園 るみ子
 東京 平野 征子

村上喜代子選

春泥を飛び越え走者また走者
 河豚刺の一片つちに柿右衛門
 指組みてただ春暁の中にをり
 廃校の校長室に春子櫓
 広島忌鉄柱の影濃かりけり
 子に話すごと樹に話す日永かな
 水甕を置く囀のどまんなか
 大仏の大足に群れ初雀
 梅の実を挽ぎて闇夜を軽くせり
 紙一枚めくれれば明日あたたかし
 秋風やたがひに違ふものを見て
 振り向けば一木となり雪女郎
 爪切つて身軽となりし蝶の昼
 産声ははじめての息春の星
 入寮の荷物少なし初桜
 足跡は男の歩巾深田凍つ
 膝ついてしまへば本気潮干狩
 亡き人の分も米研ぐ彼岸かな
 ひとつでは寂しきものに風車
 路地に似て墓苑に番地うらけし
 桜咲き村は昔をとりもどす
 宵節句金平糖は角で立つ
 笑ふたび目のなくなる子初節句

岐阜 廣瀬あや子
 神奈川 大矢知順子
 京都 大藪眞知子
 東京 西尾 智美
 広島 坂本たか子
 兵庫 出店智恵呼
 北海道 大澤 久子
 千葉 小俣たか子
 宮城 石森千賀子
 愛知 古藤 欣也
 富山 脇坂琉美子
 神奈川 宮崎登美子
 富山 小坂優美子
 東京 佐瀬はま代
 東京 鶴巻貴代美
 大阪 白木原玲子
 大阪 飯干 久子
 宮崎 塩野谷慎吾
 千葉 塩野谷 洋
 大阪 西田 洋
 千葉 宮島ひろ子
 和歌山 保田 敏子
 兵庫 志々見久美
 東京 田村登代子

森田 純一郎 選

横澤 放川 選

難民の手に囲まるる焚火かな

よろづ屋の日除がバスの待合所

風紋の尖る砂丘にある余寒

降る雪に身じろぎもせず寒立馬

冬の川中洲の一つ増えにけり

貨車過ぎてなほ揺れてをり姫女苑

白南風や海へ尽きたる滑走路

ままことのやうに雛を飾りけり

花言葉信じて開く種袋

潮入川へだて踊の櫓かな

百歳と隣合せの葉喰

順番が来たかのやうに躑躅咲く

昭和の日チキンライスに国旗立て

納屋積の藁の匂へる雨水かな

故郷は海市の先にゆらめけり

農小屋の開けつ放しの遅日かな

巫女舞の鈴音玉なす花鎮め

潮の香の強くなりけり夏隣

字と字つなぐ木の橋つばくらめ

戦争を少し語りて毛糸編む

長崎 牛飼 瑞栄

東京 金谷 洋次

鳥取 山田 哲夫

愛知 富田 範保

岡山 池田 純子

広島 坂本たか子

広島 坂本たか子

北海道 広瀬むつき

山形 栗原ただし

広島 坂本たか子

新潟 小黒 音楽

東京 清水美保子

岐阜 森 佳子

愛知 千田 一到

富山 道端 齊

広島 新長 麗子

東京 小藤 狐童

広島 坂本たか子

青森 吉田千嘉子

東京 小山 蓮子

向日葵の空と大地が戻るまで

ただそこに立つために訪ふ爆心地

原爆忌指一本で開く傘

能登半島海へ海へと田水張る

苗札に子の嫁ぐ日を記しをり

春立つ日宇国旗色の鶴を折る

角伐の枕の土を払ひけり

鳴く蟬も鳴かない蟬も無言館

今鋤きし土に息する秋の蝶

弘法市目刺の臭を持ち歩く

みな力出し合つてゐる物芽かな

長閑しや小突けば動き出す玩具

夕蟬や爪立ち外す忌中札

堰越えてゆつくり結ぶ花筏

兜太忌に生まれし子豚藁で拭く

表札に考生きてゐる帰省かな

こぶし咲く日にけに光りゆく空に

国境の島へマフラ―巻き直す

固まりをほぐせば四匹の子猫

笛を吹く形の指や流し雛

上り鮎四十川を選びけり

十二月八日しづかに拭ふ老眼鏡

愛媛 荒川 月

大阪 今井 文雄

千葉 梅津 紀子

東京 内田 廣二

埼玉 本庄 康代

奈良 高塚 康文

神奈川 倉谷 安子

神奈川 半澤 清隆

静岡 勝山 美枝

兵庫 田中 敏子

北海道 大谷 博光

茨城 坂場 俊仁

石川 榎谷 栄子

大分 溝野智寿子

埼玉 武藤 三山

千葉 樫本聖游子

神奈川 工藤 茶亭

三重 山中 悦子

滋賀 小野 雅子

和歌山 白井 慶

高知 藤原佳代子

東京 天野みつ子

●選考経過

全国俳句大会委員長

小島

健

公益社団法人俳人協会主催、朝日新聞社後援の全国俳句大会は、今年第62回を迎えました。コロナ感染の影響を受け、令和2年から4年まで会場に於ける俳句大会は出来ず、今回は4年振りに朝日ホールにおいて開会する運びとなりました。応募数は昨年より約1500句少ない11870句でした。この全作品は次の予選者によって予選を行いました。

伊藤伊那男・菅野孝夫・徳田千鶴子・中西夕紀・檜山哲彦・藤田直子
藤本美和子・松尾隆信・松岡隆子・村上喜代子・森岡正作・山西雅子

(以上、五十音順一次予選者)

予選は全作品を2名以上の予選者が眼を通し、幅広く採るようにしましたが、予選通過数は昨年より235句少ない、1011句でした。(応募句の8・5%)

予選通過作品はこれを無記名でプリントし、その中から40名の選者に各々特選3句及び入選20句を選んでいただきました。

各選者の特選句を2点、入選句を1点として集計した結果を、

大串 章・片山由美子・西村和子・能村研三・小島 健

の5名による選考委員会で審議を行い、高点句の中から作品としての品格を考慮して、5句を大会賞、11句を秀逸賞と致しました。選考の過程や選考後に作者に確認の結果、類句や既発表句等であることが判明した作品は、応募要領に従い入選を取り消し、該当箇所は空欄にしております。

ご応募いただいた皆様にお礼を申し上げますと共に、今後のご健吟を期待致します。また、選考に当たられた諸先生方に感謝申し上げます、ご報告と致します。

予選通過作品集

北海道

1	胎動にふと手のとまる夜なべかな	赤繁 忠弘
2	水甕を置く罫のどまんなか	大澤 久子
3	畳針刺されしままに寒明くる	林 直子
4	捨て雪の山の陰なる蒼さかな	宮田春夢子
5	見送りし帰路子の好きなかたつむり	大谷 博光
6	みな力出し合つてゐる物芽かな	〃
7	春愁や鏡の前のもう一人	畠 典子
8	冠の転がり出でし雛の箱	広瀬むつき
9	ままごとのやうに雛を飾りけり	〃
10	氷上の鶯の闘ひ日暮るるに	名取 光恵

11	万緑の出口国道五号線	高田 喜代
12	抱く子の丸ごと柔き春の昼	濱崎 敏子
13	狒犬を撫でゐて受験生らしき	伊藤 黎
14	仕舞には消えて無くなる雪なれど	岩崎とし恵
15	北に生き北しか知らず畑を打つ	伊藤 やす
16	ルーキーの放つ速球春蘭ける	成田 智子
17	トンネルの先もトンネル山笑ふ	〃
18	父よりも大き靴穿き卒業す	林 佑子
19	鳥雲に水煙に舞ふ天女ゐて	松田 静枝
20	沼尻に心平を恋ふ蝌蚪の群	角田 桑里

青森県

1	啓蟄の水にゆらめく銀閣寺	西川 無行
2	かまぐらの百の灯や城浮べ	笹原 郁子
3	小鳥来る海山近き千空碑	〃
4	一打ごと心身ほぐす春の畑	葛西 行雄
5	とまどひの跡のありけり蟻の道	工藤 邦子
6	ぼうたんの芽にしてすでに威をはれり	中谷 恭子
7	轡りや鞆の中の着信音	〃
8	師の句碑のかたへに松の色変へず	京谷 みき

9 しやばん玉見えざるものに触れて果つ
 10 鍋の柄の螺子巻き直す昭和の日
 11 藍壺に深まる藍や鳥渡る
 12 ごくごくと飲む耕しのあとの水
 13 袋掛梯子の影の消ゆるまで
 14 むらさきの白の微風やクロツカス
 15 字と字つなぐ木の橋つばくらめ
 16 飛花落花飛花落花してひと日かな
 17 目刺焼くなんだかんだと連添うて

高橋 千恵
 小笠原聖子
 佐々木雅翔
 小野 寿子
 田端 千鼓
 諏訪 正子
 吉田千嘉子
 新井山雅行
 鈴木志美恵

岩手県

1 花どきの恋の一舟漕ぐはよき
 2 急逝の机上に遺る冬帽子
 3 囀や向かひ合はせにへアサロン
 4 さくらさくら学徒の兄の還らざる
 5 漁り火の増ゆる八十八夜かな
 6 永き日や欠伸移して猫背伸び

大畑 善昭
 岩渕みゆき
 伊藤 恵美
 及川 忠子
 木関 偕楽
 鈴木 秀悦

宮城県

秋田県

1 梟の一声に闇動きけり
 2 囀や鉄骨歪む津波跡
 3 梅の実を挽ぎて闇夜を軽くせり
 4 退職の帰りにいちご買ひにけり
 5 春の滝修験の山に轟けり
 6 十葉の庭から上る生家かな
 7 満開の花を分けゆく水の音

安達 朝子
 石森千賀子
 仁平よしあき
 坂内 佳禰
 鈴木 勝也
 山田 史子

山形県

1 ふと靴に乗って動かぬ初蛙
 2 冬の田や四方に村と山を据ゑ
 3 鶯の声に御籤を結びにけり
 4 研ぎ屋来てひかりを増やす百千鳥

浅野 法子
 佐藤 景心
 丹野 剛紀
 岸部 吟遊

1 魴鰯の胸鰭青き四月馬鹿
 2 三番も月山讃ふ卒業歌
 3 花言葉信じて開く種袋

須階 米子
 鈴木 正子
 栗原ただし

4 月山に雪の来てゐる薪棚

鈴木 あい

福島県

1 鎌で剥く野良の昼餉の梨甘し

善方タミ子

2 入籍のはがき一枚桃の花

武藤 主明

3 花冷やまつ毛の長き麒麟の目

佐藤 和子

茨城県

1 滝凍てて息吸ふ己透きにけり

平野 悦子

2 待ち合はす駅東口梅三分

高井まさ江

3 曲り屋の梁の太さや囲炉裏の火

砂押 悦子

4 土に生き土に生かされ麦を踏む

小山 千里

5 麗かやだいだら坊が踏みし湖

植野 康二

6 那須岳のひかり満ちくる田掻馬

笹川 昌子

7 盤上の卒寿の力山笑ふ

石田誠一郎

8 婆は擦り尻は合はす手や仏生会

田中 ゆず

9 長閑しや小突けば動き出す玩具

坂場 俊仁

10 ぬがはぬがはタンポポ踏むな鬼ごっこ

羽 金 堂

11 花の山小さな旅を満たしけり

萩原 清

12 石段へ紅椿落ち踏まれさう

堀 誠

13 鶏と半分こする春キャベツ

染谷 翠溪

14 初音すと知らせたき人もう居らず

小泉 光子

15 帰り船波止に待ちけり赦免花

海老原元彦

16 初雲雀空まだ少し重さうな

君島真理子

17 咳の夜の背中に母の手の記憶

宮九千恵子

18 やわらかき畑の傾斜や野蒜抜く

宮本 秀政

19 ユニセフへ募金の子の手風光る

飛田キミ子

栃木県

1 偕老の内裏様のみ飾りけり

平岡 丈子

2 笹鳴きやをさなは脚の定まらず

植木 英雄

3 昨日より今日の楽しき落葉道

森 加名恵

4 啓蟄や歩いて逃げる庭の鳩

小林 由典

5 浜に立ち波の音聴く震災忌

西里満喜子

6 つまづきし石に声あり冬の坂

郡司恵美子

7 水際の風立つところ花筏

森 ふく

8 鉋毒の遙かな記憶野火走る

阿久津勝利

9 停年のブランコ囑託のベンチ

直簗 青析

10 籐の束水に漬けおく日永かな
 11 耶蘇村の寢墓や積る春落葉
 12 あたたかや寝起きの水を呑みほしぬ
 13 侍塚の裾になづなの花白し
 14 しば桜満開妻は入院中
 15 濃淡のありし血縁花蘇芳
 16 四十年寡婦を通して葱さざむ
 17 順繰りに河馬撫づ園児のどけしや
 18 振舞ひの茶を置く駅舎桜東風

群馬県

1 太陽に芯を抜かれし干大根
 2 草笛を覚え道草おぼえけり
 3 吊橋を蛍の国へ渡りけり
 4 新聞をくまなく読みて蜆汁
 5 雪解けて鉄音たかし峡の村

緑川 啓子
 〃
 大塩富美子
 芝宮留美子
 氏家 亨
 会田 比呂
 橋本由紀子
 〃
 〃
 〃
 原 清香
 木下 涼薫
 〃
 小暮美恵子
 笠原 榮

埼玉県

1 竹ひごを編み影を編む夜なべの灯
 2 苗札に子の嫁ぐ日を記しをり
 3 音といふ音を力に滝落つる
 4 顔ぶれの変らぬ村の焚火の輪
 5 ましら酒山が重たくなりけり
 6 耕人のまづ一握の土を見る
 7 天つ日を集めて花の隅田川
 8 子を背負ひふらこの子の背を押せり
 9 草引けば大和島根の土匂ふ
 10 母ふたり健やかに在す吊し柿
 11 這ひ這ひの口あけて待つひなあられ
 12 うららかや抱つこをせがむ地べたの児
 13 咲き残るよりも奔放散る桜
 14 兜太忌に生まれし子豚羹で拭く
 15 白息の間ひ白息でかへしけり
 16 見はるかす嬬歌の嶺や春田打つ
 17 滑りたる跡に艶あり春の泥
 18 紫木蓮内に秘めたる象牙色
 19 靴紐を結べば草の芳しき
 20 子等去りて揺るるふらこ明日は晴れ
 21 太陽に顔を揃へて犬ふぐり
 22 羊羹の切り口ざらと余寒かな

神沢 英雄
 本庄 康代
 中島 みつ
 松代 忠博
 鈴木 恭子
 中村 鈴子
 川野 当子
 須賀 遊子
 三田たか子
 島貫 恵
 村井 栄子
 小川 悦子
 小山内 敏
 武藤 三山
 三浦 恭
 高嶋 静
 岡根谷良臣
 松永 浮堂
 〃
 小俣恵美子
 橋本 良子
 大野まりな

23	貨車の影重たき二百十日かな	吉野真紀子	45	木に籠る鳥の身じろぐ良夜かな	野坂 潭
24	鳥雲に訛とび交ふ道普請	服部 敏子	46	日面へ出でし軽さに雪蛭	〃
25	自転車のかごに飛び乗る春キヤベツ	小峯千枝子	47	園児らの土管くぐりや地虫出づ	柴崎加根子
26	五七調身の内にあり実朝忌	野木 和美	48	教室の窓磨き上げ卒業す	関 とし江
27	くさぐさのふれ合うてゐる夕朧	須田美津子	49	紫木蓮ゆるき指輪をもてあそぶ	横田 幸子
28	黄泉の旅いま何の迎り冬日向	尾上 潤一	千 葉 県		
29	堤防の上のバス停虎落笛	今井 俊			
30	笑ひ声きれいな人と春惜しむ	草地 明子			
31	嘘少しついて帰りぬおぼろ月	瀬川 節子			
32	形なき水を形に紙漉女	西田せん六			
33	花みかん隣り近所は香の中に	中村 玲子			
34	山笑う兜太句碑から飛び出す子	横田 信江			
35	鳥を呼ぶアイヌの歌よ木の根明く	島貫 恵			
36	ふるさとへ帰る気もなし春の鴨	河瀬 俊彦			
37	車椅子の母に連れられ野に遊ぶ	〃			
38	涸川へ護岸工事の土崩る	田口 武	6	大仏の足に群れ初雀	小俣たか子
39	庭隅の石臼が好き蜥蜴の子	眞下 杏子	7	春光を廻し長竿放りけり	和田 満水
40	しんがりは母と思へり雁帰る	大橋 松枝	8	吊り雛の千支の兔の廻りをり	辻本 葉子
41	しばらくは一人が愉し大花野	梅田ひろし	9	一日が長し短かし春炬燵	佐々木リサ
42	また雲に翳るなぞへや梅の花	坂上 隆	10	歌垣の山懐の初音かな	〃
43	水切の親子を見遣る遍路笠	松坂 昌幸	11	祇王忌や愛は得がたく醒めやすく	戸田 一雄
44	啓蟄や宇宙旅行の話など	折原れつ子	12	表札に考生きてゐる帰省かな	榎本聖游子
			13	病む母に最後の嘘をつく霜夜	〃

14 墨堤の風を袂に卒業す
 15 春灯のぼつんと夢を見てゐるか
 16 永き日やひとり居の音ひとり聞く
 17 かしこさを母の説きしや猿廻し
 18 蜘蛛の囿に雨の曼荼羅仏生会
 19 み吉野の逢魔が時を花の舞ふ
 20 いには野に空堀いくつ鳥の恋
 21 原爆忌指一本で開く傘
 22 鏹の浮く引込線や犬ふぐり
 23 また一つできぬこと増ゆ羽抜鳥
 24 待ち人は来ると神籤に初音かな
 25 じやんけんにばあを出す癖熱帯夜
 26 本読めば活字の上に乗る子猫
 27 久に会ふ人みな優し葦草
 28 姉欲しと兄欲しと吹く石鹼玉
 29 お風呂場の溢れる「あのね」子どもの日
 30 未来図に近付く春や子の白衣
 31 よちよちと歩みてころび春隣
 32 亡き人の分も米研ぐ彼岸かな
 33 すかんばや一升釜にある昭和
 34 伝言板今もある駅鳥雲に
 35 動かざる時計にも時はなみづき

鈴木 禮子
 祐 森司
 中村 かよ
 関 妙子
 湯浅 康右
 大久保文夫
 西野 桂子
 梅津 紀子
 中間美砂子
 宮沢千恵子
 小橋 すみ
 森崎 森平
 中川 素子
 長澤きよみ
 四季春茶子
 加藤 峰子
 向後 保利
 塩野谷慎吾
 樋渡 洋子
 工藤 文子
 高橋 道子

36 路地に似て墓苑に番地うららけし
 37 ざんぷりと柚子湯繁吹かせひとりなる
 38 水鏡柳瑞々しきあした
 39 雪女夜ごとこきりこ聴きにくる
 40 その上にまた降り積もる落葉籠
 41 紫陽花や雨の釈迦堂切通し
 42 花吹雪正気狂気の中にある
 43 みな海を見て並びをり初燕
 44 ブラウスに風たつぷりとかすみ草
 45 新年の声のめでたき狂言師
 46 浄土へは遠し遠しと法師蟬
 47 亀鳴くと言ふて目尻に笑ひ皺
 1 買初の珈琲豆とクロワッサン
 2 脱皮せし蟬青白く闇に浮き
 3 能登半島海へ海へと田水張る
 4 来し方の如く二人で麦踏み
 5 ゆつくりと地球は廻る花筏
 6 まくなぎの遊びに少し入れてもらふ

宮島ひろ子
 執行 香
 箕輪カオル
 鈴木 和子
 島崎 妙子
 小俣たか子
 滝口美智子
 後藤 菊子
 川島 紬
 渡辺さなえ
 衣川 洋子
 小林 文隆
 内田 廣二
 鈴木三光子
 山本 猛
 土居ノ内寛子

東京 都

7	筆を置き窓に凍星近くせり	下田 峰雄	29	ソの字の手ハの字の足や阿波踊	齊藤 保志
8	凍蝶の陶片と化す大地かな	坂内 時子	30	流木に光置きゐる冬の蝶	〃
9	春泥を来て跪く観世音	伊藤 桂舟	31	金魚買ひ水の重さを持ち歩く	関戸 信治
10	廃校の校長室に春子楳	西尾 智美	32	利休忌や一期一会の躰口	高瀬 和子
11	懸命に亀泳ぎをり涅槃西風	小谷 武生	33	ふくふくと頬の出揃ふ古雛	馬場眞知子
12	笹鳴の笹をつたひて途切れざる	真隅 素子	34	接写して土筆一本聳えさす	中村 藍人
13	寄鍋に足すも独りの夕餉かな	枅野 雅憲	35	子どもらは湯気の塊冬至風呂	相田 康子
14	松任谷由実のピアノのしぐれけり	関 美奈子	36	遠き日をまあるく抱いて日向ぼこ	関戸 信治
15	杼となりて雨の糸織る燕かな	樋口 昇る	37	ひよいと手に取る草餅のゑくぼかな	杉木 美加
16	昏昏の姉の静けさ古雛	島田 恒子	38	鶯や耳そばだてて三狐神	中村 阿弥
17	創世のノイズ幽かに冬銀河	野上 卓	39	寄せ書はあの子のとなり卒業歌	山下 清実
18	大鍋に火の粉飛び込む芋煮会	佐藤 孝志	40	よろづ屋の日除がバスの待合所	金谷 洋次
19	夏帯をボンと叩ひて鏡まへ	鈴木 孝彦	41	吊革に長短のあり鳥の恋	小高 正子
20	喪の明けて独り波聞く端居かな	金谷 洋次	42	花の昼ほろほろ溶ける干菓子かな	乗松 明美
21	帰る日の佐渡の港のしじみ汁	阿川 暢子	43	皆勤賞母に掲げて卒業す	芝 のぞく
22	食べて寝て遊んで食べて寝る子猫	〃	44	貼紙に板前募集花の路地	廣岡あかね
23	夕雲雀どこかに子の聲父母のこゑ	杉林 秀穂	45	順番が来たかのやうに躑躅咲く	清水美保子
24	つれあひといふ言の葉のあたたかし	草野 准子	46	万愚節席譲らるることに慣れ	森尻 禮子
25	アトリエの窓は北向き冬薔薇	染井かしこ	47	記憶より母校新し松の芯	望月 澄子
26	虹のあとひとりふたりと野良に出る	小泉 良子	48	人はみなたゆたひながら花の中	手島 恵子
27	ブロッコリー逆さに立てるマヨネーズ	関口 昭男	49	小鳥来る一人尻取りしてをれば	富山 光義
28	逆立ちのままのしばらく土匂ふ	百瀬さやか	50	白粥はひと日で飽きて春の風邪	佐藤 孝志

51	青空や母の母校に入学す	下谷内綾子	73	眠りたる吾子のぬくみや花むしろ	倉本 典子
52	楠大樹囲みてすすむ踊りの輪	堀井より子	74	逃げ水を追うて一世を老いにけり	竹内 柳影
53	猿山のボスと目の合ふ花の昼	〃	75	夏空へ組立てられてゆく足場	西澤みず季
54	竿三本投げて見つめる春の潮	加来 靖生	76	星一つ寄り添つてゐる十三夜	星野 麻子
55	産声ははじめての息春の星	佐瀬はま代	77	奥宮へ落花に湿る石畳	鈴木 智子
56	世界史の窓から平らかなるプール	嶋田 伸子	78	コスモスの大きく揺れて争はず	仲 栄司
57	菊の日や父の本にはグラシン紙	〃	79	世間へと腹据ゑなほす四日かな	板坂 壽一
58	桜薬ふるもう犬は飼へないと	安藤 潤子	80	春荒れや鏡に映す三頭筋	荒井喜美子
59	雪吊の青空の端束ねたる	鶴巻貴代美	81	あいの風髪の芯まで故郷なり	小林 千草
60	入寮の荷物少なし初桜	〃	82	薬苞をはみ出す自然薯揚げ来る	谷川 治
61	画紙へ置く墨のかをりや春の雪	丸山ゆき子	83	闇市に話及べり菜雑炊	〃
62	菜の花の眩しき道を兄見舞ふ	萩原まさこ	84	母の日や母の幸せ妻に見る	三 界 峯
63	金華山に鎌振り上げて若布刈る	田沢健次郎	85	円位忌の浜の小石は花の色	本多 遊子
64	補聴器外し存分に髪洗ふ	小西 敬子	86	いくさなきこの嶋国の青き踏む	暮目 良雨
65	花行脚一期一会の空と風	広海あぐり	87	逃水の中に亡き妻見え隠れ	〃
66	巫女舞の鈴音玉なす花鎮め	小藤 狐童	88	春ともし纏ふ衣のやはらかく	長尾ゑみる
67	今も尚じたばた生きて敬老日	榎本 敬子	89	狐火やもと来た道へ迷ひ出て	木塚 眞人
68	捨て浮標に残る潮の香花大根	市村 栄理	90	滴るや譲り合ひたる崖の道	山内美佐子
69	中継地からも蟬声黙禱す	大石香代子	91	ひようひようと裾吹き抜ける風の盆	倉本 尚彦
70	つばくらや学校に田の四畳ほど	〃	92	城山の水引かれきて蝌蚪生まる	伊庭 美邦
71	始業ベル枝垂れて白き花あせび	グラブ弘子	93	ごはごはと木綿の乾ぶ敗戦日	市川 浩実
72	夏芝居影絵のやうに始まりぬ	浦田 祐子	94	浮世絵の上目遣ひや春の宵	山本 祐子

95	ポップコーン大きく掬ふ花の昼	清水ゆみ子	117	クッキーの缶に折紙立子の忌	小池 博美
96	山風の音たててくる巣箱かな	神戸 サト	118	折り畳むだけの教科書敗戦忌	大野 南蒼
97	霊峰は雲の中なり遅桜	〃	119	綿虫や湖面に碧の濃きところ	日暮 邦子
98	先生の最終講義春の雪	市村 和湖	120	あらたまのあはうみ金波銀波かな	小山 博子
99	城垣に遊び石ありすみれ草	倉林 美保	121	桜鯛しばし包丁動かざる	中村 我人
100	葉櫻や学園通り洋菓子屋	入野ゆき江	122	かいつぶり浮いてすぐさま鳴きにけり	山岸美代子
101	陽炎や遺品を探す津波の地	花野 くゆ	123	画架立つる君を花野に座らせて	小出 功
102	虹色のやがて空色しやばん玉	〃	124	うららかや洗濯日和に干し忘れ	小林 章
103	十二月八日しづかに拭ふ老眼鏡	天野みつ子	125	迷ひたく迷ふ城下や花は葉に	小出 功
104	太郎稻荷次郎稻荷と椿落つ	花房 礼子	126	遅桜そつと駒置く名人戦	松木 溪子
105	一本の杭に分かれて春の水	〃	127	手になじむ亀の子束子春惜しむ	〃
106	沖合に二百十日の巡視船	弾塚 直子	128	税申告終へて安堵や春の月	小林 黎子
107	潮入の離宮に来たる都鳥	木嶋 純子	129	紅梅に遊び白梅をおろがみぬ	楠原 絢子
108	雀の子式部ゆかりの寺に跳ね	瀬戸 紀恵	130	東京で買ふふるさとの寒卵	田中 久幸
109	人去れば妖精の来て薔薇の園	江上 マノ	131	春霞白鳳仏は波瑠の中	佐藤みちゑ
110	爪先を濡らして跳んで春の水	菅家 瑞正	132	釣り好きの兄は竿振る天の川	近藤 精一
111	山遠く見て春愁の臉かな	〃	133	今川焼頬にもあてて家路かな	松原 吉信
112	子規庵の庭のをちこち蚊遣香	石井 光子	134	父は吾を君づけで呼ぶ竜の玉	乙幡千枝実
113	忌中とふ晴読雨読春惜しむ	〃	135	贅沢の出来ぬ母あて終戦忌	角宮しづか
114	春空へ伸ばす背骨の鳴りにけり	村田 牧美	136	母の子でありし年月花の塵	〃
115	ほれ烏賊とバケツに貰ふ鳥暮し	影山十二香	137	指笛を吹きて流星さそひ出す	〃
116	北窓を開き一輪挿しを置く	大西まりゑ	138	飛花落花幹にありたる脂の香	大林 和代

139	色のなき戦の展示花の昼	大林 和代
140	歌よみの胸は鱈もつ薄氷	平松うさぎ
141	連翹の跳ぬる一枝を活けあぐむ	星野猪久子
142	水くぐらする春筍の白さかな	外川 綾子
143	竹の秋二人の前のオムライス	内田喜久子
144	亡き夫と選びし墓に詣でけり	平野 征子
145	遠足子口々に年教へくれ	岡本 春水
146	戦争を少し語りて毛糸編む	小山 蓮子
147	寒明や保養の母のこゑに張り	田村登代子
148	柞山わつと木の芽の名乗り出づ	〃
149	笑ふたび目のなくなる子初節句	〃
150	木洩れ日のひとつひらひら蝶となり	〃
151	部屋に礼言ひて退院朝ざくら	〃
152	草刈りて土手の日差しを均しけり	〃
153	思ひ出のへこみしままの夏帽子	曽根新五郎
154	献立を考へてゐる蝶の昼	〃
155	道標どほりに春を惜しみけり	〃
156	壺焼の螺旋のからだ引き出せり	中島悠美子
1	万緑の真中に立ちし展望台	富沢 昌晴
2	こんにやくと言へば上州針供養	甲斐 輝子
3	引力はしづかなるもの牡丹散る	小倉 立史
4	二胡の音のそよぐ大草原の初夏	戸恒 東人
5	風見鶏くるりと日脚伸びにけり	倉谷 安子
6	角伐の枕の土を払ひけり	〃
7	唐辛子吊つてますます頑固かな	〃
8	掘り上げし春筍に物言ひにけり	〃
9	鶏小屋に放りこんだる茎立菜	〃
10	鳴く蟬も鳴かない蟬も無言館	半澤 清隆
11	時の疫のなほ旅ごころ西行忌	清水 善和
12	おかげさまで今日はしあはせ桃の花	上ノ堀ミツヨ
13	原爆忌運河静かに日を流す	相 道生
14	満開の桜並木に飴細工	高野 信一
15	黙禱の球場に聴く秋の蟬	〃
16	まづ縮み尺蠖尺を取りはじむ	高橋 真也
17	連風の先鋒雲に喰らひつく	衛藤 佳也
18	秋めきて夕日吊られてゐることし	曾谷 晴子
19	あどを打ち先を促す団扇風	岸本 圭舟
20	カウベルの音の風来る夏野かな	井手 浩堂
21	根も葉もなき噂に揺るる水中花	山口ちひろ
22	棺の父泣かせた頃や蟬時雨	高梨 裕

神奈川 県

23 こぶし咲く日にけに光りゆく空に
 24 半夏生薬袋のかさばりぬ
 25 振り向けば一木となり雪女郎
 26 母に夫吾に父なき敗戦日
 27 日直のわが名を消して卒業す
 28 星屑の音色さやけし鳥総松
 29 演出の手のひとつ鳴り初稽古
 30 土筆食ふ夜の血圧高きかな
 31 あの影は一人立ちぞや春障子
 32 落し文野仏の手に委ねられ
 33 朧夜や吊しランプのカーバイト
 34 花散らしの雨のあしたとなりけり
 35 いしころと思へば地蔵曼珠沙華
 36 湧き水の音に揺れる萼かな
 37 国盗りの地に来て城の春惜しむ
 38 背負ふ子に若布にぎらせ若布干す
 39 大根引く父へ船笛鳴らしけり
 40 花の種風船に入れ東北忌
 41 並べ干す布巾の真白桜まじ
 42 待つといふ長閑さのあり昼の酒
 43 記念樹の空へ伸びゆく卒業歌
 44 一木に一族そろふ花筵

工藤 茶亭
 戸恒 東人
 宮崎登美子
 相良 文雄
 浅木 ノエ
 百田 広香
 柿沼 盟子
 数馬 草原
 宮永 忠夫
 山田 和子
 〃
 広野 美実
 丸子千枝子
 宮岡 弘
 長浜よしこ
 〃
 高橋紀美子
 山崎史保子
 岩下 正文
 伊藤美紀子
 堤 宗春

45 河豚刺の一片づつに柿右衛門
 46 父帰る家の中まで霧連れて
 47 シーサーの門に玉巻く芭蕉かな
 48 薫風やサーカス小屋の組み上がり
 49 龍子の富士大観の不二春動く
 50 草餅や大口あけて食べてこそ
 51 搾乳機洗ひ清めて卒業す
 52 春まけて平家の島の舟隠し
 53 母といふかのぬくきもの返り花
 54 子育ての合い間つばくろ宙返り
 55 「おかえり」と下校の児らへ飛花落花
 56 昭和の日スキミルクのドラム缶
 57 草の絮飛んでひなたの残りけり
 58 霞着て連山はなほ耀歌の地
 59 水温む草に転がすランドセル
 60 雷鳥や飯盒返す雲の上
 61 仏滅の日の求婚と聞く良夜
 62 薫風や吹奏楽部行進す
 63 枯葉落つふつと力を抜くやうに
 64 泣き声は背なで寝息に虫時雨
 65 草ゆるる谷戸のせせらぎ糸蜻蛉

大矢知順子
 梅津 大八
 乗田眞紀子
 月野木若菜
 川島ちえり
 松下 宏民
 〃
 奥田 君子
 前田 炎陽
 竹岡 広仁
 山森 伸子
 正木 勝
 緑川美世子
 小林ひろこ
 千葉 喬子
 〃
 松下 宏民
 藤田 勝彦
 喜多村純子
 山中 洋子
 黒川 浩一

長野県

- 1 善人の顔もて花の門くぐる
- 2 岳人の耳鼻の火脹れ二月尽く
- 3 加佐岬無人燈台葛嵐
- 4 青春の残像に生く昭和の日
- 5 同じ歌同時に出づる春野かな
- 6 前髪の貼りつく額かき氷
- 7 螻蛄鳴くや村の舞台の土間奈落
- 8 花冷の鏡を磨く骨董屋
- 9 残されし者の歳月色鳥来
- 10 佃煮の蛸も買ひぬ昭和の日

野口 和男
 〃
 木原 登
 伊東 加寿
 中里とも子
 〃
 北川みや子
 押田 みほ
 澁谷伊佐尾
 高尾 真琴

新潟県

- 1 一刀で鯉をさばけり秋うらら
- 2 ほっとけば直る仲なり衣被
- 3 退院の夫に割りたる寒卵
- 4 二階より降りる足音栗ごはん

谷井野武士
 高埜 健蔵
 片桐さと子
 高埜 健蔵

- 5 新潟は別嬪どころ新酒酌む
- 6 口よりも耳の衰へとろろ飯
- 7 炎ごと倒れ出したるどんどこな
- 8 誕生の嬰負ひ配るさくら餅
- 9 つもるだけつもればしづか雪下す
- 10 雪折の杉の香の降る通学路
- 11 三尺の氷柱はらひて棺出づ
- 12 天辺に捨てられし田や田螺鳴く
- 13 百歳と隣合せの葉喰
- 14 一病を足されし帰路や揚雲雀
- 15 黄落や上野の森のカレーライス
- 16 門前に大福を買ふ傀儡師
- 17 周波数合はざるラジオ鳥雲に
- 18 愛されぬ猫のまどろむ冬日向
- 19 武骨なる手焼花びんや山桜
- 20 月光の四千本の城桜
- 21 寛解とふ慎ましき語や青き踏む
- 22 春耕に体の慣れしきのふけふ
- 23 穂の芽や軍手に残る棘一つ
- 24 対岸に灯の入る頃や合歓の花
- 25 牧の牛色無き風を尾で払ふ

小林 博子
 小林 純子
 〃
 関 千年雄
 小黒 音楽
 〃
 〃
 〃
 〃
 山之内喜七
 山本 武子
 〃
 北 悠休
 小山 洋子
 佐藤 昭子
 大島 小春
 曾我 啓子
 清水 恵子
 金子よし子
 熊谷 國男
 〃

富山県

1	草むしり土をくすぐるやうにかな	荒田眞智子
2	缶ビール一本おまけの誕生日	源通ゆきみ
3	出来たての紺おし出して牽牛花	荒田眞智子
4	田起しや立山よりの朝日浴び	中坪 達哉
5	代替りせし顔ばかり農具市	〃
6	十指みな使ひ尽くして蟹しゃぶる	寺田 嶺子
7	ひもすがら光る立山春一番	浅野 義信
8	岩を打つ水は饒舌猫やなぎ	角田 睦子
9	まんさくやはじけるやうに下校の児	吉野 恭子
10	花人の流れの中へ句座帰り	〃
11	東風吹けり紙一枚の紙飛行機	大塚 喜子
12	日永し待合室のシーラカンス	四十物文代
13	とんぼにはとんぼの空の高さあり	脇坂琉美子
14	野遊びや子はともかくも走るもの	〃
15	秋風やたがひに違ふものを見て	〃
16	惜しみつつ今日をたたみぬ花衣	〃
17	爪切つて身軽となりし蝶の昼	小坂優美子
18	浮くたびに山昏れてゆくかいつぶり	杉本 恵子

石川県

19	故郷は海市の先にゆらめけり	道端 齊
20	にぎやかに風と連れ立つしやぼん玉	小嶋トシコ
21	海までは行けぬ笹舟夏の川	二俣れい子
22	荒海のけふ晴れわたる桜鯛	新村美那子
23	立山の消えてあと続ぶ春の月	吉村 昭雄
24	母の日や母ならぬ身に花届く	畠山 美苗
25	城址に金次郎あり囀れり	石黒 順子
26	家持の立ちし野にゐて初音かな	〃
27	電波時計ぐるぐるエープリル・フル	磯田 和子
1	初雪の白山をすゑ日本晴	前田 時余
2	夕蟬や爪立ち外す忌中札	榊谷 栄子
3	影と聲取りに戻りし船虫よ	沖野 晶子
4	陽炎へ突つ込んでゆくオートバイ	吉川 静代
5	琅玕の湖より行く雁残る鴨	坂井 榮子
6	歌留多読む恋の歌とは知らぬ子へ	松原かほる
7	蝶結び出来て駆けだす春の靴	前 九疑
8	レコードの飛びたる音も夜半の秋	太田 硯星
9	涅槃会にしばし座し行く介護妻	平田クニ子

10 木の根開くダム湖を渡る風平ら
11 クレソンの根方に軽き水の音
12 母に抜く小骨百本春鰯
13 冬蜂の転がる窓辺位牌堂
14 日向ぼこ人であること薄れゆく

澤田 静雄
今越みち子
引持 幸子
井端 久子
國田 欽也

福井県

1 春兆す金箔散らす加賀の菓子
2 雪溪を来て雲上の人となる
3 五箇山の霽れて楮の雪晒し
4 遠洋の航海を終へ卒業す
5 燕の子戸口に残し転勤す
6 つちふるや暗くしづかに露人墓地
7 山茱萸や紙の女神の降りし里
8 饒舌の女医の再診朝桜
9 春の風黒板アート明日消ゆる
10 山笑ふ後ろの正面は誰
11 徘徊の母を襦袢に包み込む

廣瀬 利男
藤田フジ子
村田 浩
〃
岡田 有峰
倉谷 紫龍
倉谷ます美
西村 圭子
望月 典郎
橋本 芳夫
川田 邦子

岐阜県

1 シュラフより顔出して待つ流星群
2 星一つなき大空へ息白し
3 降ればまづ昨日が匂ふ野焼かな
4 多喜二忌や石ころ多き畑を打つ
5 紙雛の紙に戻りつ流れけり
6 春泥を飛び越え走者また走者
7 昭和の日チキンライスに国旗立て
8 白波のつづき近江の麦穂波
9 里山のづきづき青む五月かな
10 婚の間の二十四畳養花天
11 一輪の花添へ母の介護食
12 ほととぎす木の香をとばす船大工
13 鳥雲に入る消印の街遠し
14 童顔のまま古雛となられたり
15 青空へ鋏を入れて剪定す

直井 照男
木下 仁司
福井 英敏
三輪 洋路
安田 一義
廣瀬あや子
森 佳子
後藤 和朗
七種 年男
吉村 道子
各務 恵紅
寺松美代子
森 瑞穂
園 るみ子
〃

静岡県

1 鷹一羽富士の夕日を奪ひ去る
 2 梅真白蒼天の坂登りきて
 3 風の湖揺さぶつて渡りけり
 4 今鋤きし土に息する秋の蝶
 5 山焼の火種掲ぐるにはか勢子
 6 虚子いかに鮎子不漁続く海
 7 躰づきし土やはらかき諸葛菜
 8 色褪せて遺品となりぬ紙雛
 9 雪女来るやも飛驒の和蠟燭
 10 五つ玉弾きしやんしやん新茶競る
 11 春光の一直線の真砂踏む
 12 青空の雲は動かずソーダ水
 13 レコードに針のつぶやき花の雨
 14 祖は野武士父の口癖聞く帰省
 15 子燕の空の青さにまだ触れず
 16 薄氷のみづとなりゆくひとところ
 17 文鎮の小さきつまみ寒波来る
 18 潦けふ一日の花筏
 19 恐竜の絵手紙届く敬老日
 20 傷多き仏に朱欒供へけり
 21 獣医来てまづは牛虻払ひけり

斉藤登志子
 安寿 文
 坂本 操子
 勝山 美枝
 伊藤 芳子
 鈴木 宏子
 太田絵津子
 水野 恵女
 鈴木 齊夫
 岩崎 武士
 鈴木 早苗
 大平 悦子
 河江 昌子
 渡邊とし江
 関口喜代子
 佐藤 升子
 ♪
 清野かつ江
 鈴木 紀子
 染葉三枝子
 中川 正男

22 指切りの指に力や秋夕焼
 23 鍋の焦げこそげてをれば初音かな
 24 春かたまけて起き抜けの白湯甘し
 25 花御堂羽根のきれいな鳥よぎる
 26 ゐのこづち取りつつ講話聞いてをり
 27 豚五頭荷台に二百十日かな
 28 朝ざくら淡き湯気立つ集乳缶
 29 にこにここ酷評を聞く初句会
 1 大根を煮る間に消ゆる蝕の月
 2 金環の鷹の目匠見据ゑある
 3 鷹放つ鷹匠風の向きを読み
 4 風紋をくづして歩く跣足かな
 5 合戦風綱が戦ひ火のにほひ
 6 睡蓮の睡りを覚ます鯉の鱗
 7 折紙の鞍を置きたる茄子の馬
 8 掘り立ての春筍土間を濡らしたり
 9 降る雪に身じろぎもせず寒立馬
 10 貝寄風や古地図のままの町歩む

荻野加壽子
 神田美穂子
 ♪
 渥美 絹代
 ♪
 ♪
 間島あきら
 野畑 明子
 富田 範保
 尾崎恵美子
 ♪
 藤本 恭子
 尾崎恵美子
 渡辺美智代
 ♪
 ♪
 富田 範保
 ♪

愛知県

11	ふんはりと城を乗せゆく春日傘	古賀勇理央	33	鱈を提げ長靴の父帰りけり	多田 三子
12	本流に風の促す花筏	岩田 芳雄	34	鳥引くや岬の山を低くして	鈴木 明美
13	春耕や妻に微かな力こぶ	河村 仁誠	35	納屋積の藁の匂へる雨水かな	千田 一到
14	滝壺に佇ち脳天を割られけり	稲葉 京閑	36	春の夢羽衣はまだあの枝に	堀田 朋子
15	うす紙を解けば魂入る御殿雛	岩田 芳雄	37	清明の風を通して暈拭く	林 尉江
16	葦草ほんに小さくなりし母	青山 志枝	38	飴色にガラス膨らむ春の息	富田 範保
17	日向ほこ無口な母の爪を切る	田島 楨子	39	巖かに手を組み歩む桜かな	岩田美津治
18	蛸薬師まだ燭ともる地藏盆	古賀勇理央	40	打球追ふ捕手一塁手つばくらめ	〃
19	耳飾りはづし夜学の席に着く	〃	41	開けられぬオフィスの窓や鳥雲に	安藤 圭子
20	魚鼓を打つ春の光を打ち据ゑて	西尾桃太郎	42	風船を売る拳よりひとつ抜き	篠田 篤
21	吊草の揃つて揺るる夕焼かな	館野 茂子	43	折鶴を一羽折り呉れ卒業す	重留 香苗
22	兄に譲る髪止めひとつ一葉忌	山本 光江	44	牡丹を供華に一日の始まりぬ	加藤 晴美
23	表札に残る子らの名つばくらめ	大嶋 福代	45	をみなごの露被り来る日照雨かな	古賀勇理央
24	総門は伝甚五郎亀鳴けり	大井 篤子	46	花筵まづ真ん中へ嬰這はす	〃
25	ポケットのなかのさくらをつかみ出す	梅田 昌孝	47	石鹼玉消えれば直ぐにまた飛ばす	黒野美由紀
26	小さき手の描く母円し聖五月	三品 敬子	48	桃咲くや乳房を離し嬰ねむる	南崎 文代
27	紙一枚めくれば明日あたたかし	古藤 欣也	49	夕蟬の声にはじまる野外弥撒	古賀勇理央
28	島太鼓打つて島の子卒業す	光田 道子	50	蔵のみの残る故郷や鳥帰る	河合 要石
29	土竜塚五つ六つ踏み梅探る	〃	51	啓蟄や石置屋根に草薄ら	音頭 恵子
30	金縷梅の金糸をほどく日の恵み	富田 範保	52	鴨浮寝鉄砲狭間の射程内	荒川くみ子
31	王妃の名木札に残し薔薇枯るる	〃	53	脳検査して来てりんご丸かじり	栗田せつ子
32	夕暮れのけだるき空や袋角	滝 典子	54	法話聞く春泥の靴揃へられ	荒川くみ子

55 春の宵遅く帰ると言つてある
 56 今生の花と語らふ吉野建
 57 春の夜のでのひらにとる陀羅尼助
 58 着ぶくれて移動スーパ―待つ米寿

奥平ひかる
 佐藤美恵子
 〃
 近藤 和子

三重県

1 図らずも嵯峨念仏の鉦の音
 2 屋根替の人の時折遠く見て
 3 小包で届く重箱桜餅
 4 何にでも顔出す蝶のお節介
 5 天水の薄水を割り鍬洗ふ
 6 春の波追風に浜を駆け上がる
 7 ひとり居に音なと起てよ嫁が君
 8 夏つばめ風の段差に入りけり
 9 一病を神に委ねて土筆摘む
 10 国境の島へマフラー巻き直す
 11 鎮魂の桜並木の途切れなし
 12 水よりも透け白魚の隠れけり
 13 木簡や太古の声を掘る四温
 14 青柳の風はなすときなかりけり

岩脇 五風
 手塚 泰子
 松本 愛子
 大野 利江
 宇田多香子
 神田 八三
 〃
 米野てるみ
 国枝 洋子
 山中 悦子
 〃
 西尾 敬一
 石井 洋子
 古川 和子

15 燕来て空のかたさをほぐしけり
 16 もの音のふと途絶えたる寒さかな
 17 枯蟪蛄枯るるやすらぎありにけり
 18 野火走る燐れる火を置き去りに
 19 しばらくは燕見てをり往診医
 20 茎立や老はときをり体操す
 21 花種を蒔きて呪文を唱へおく
 22 嶺ざくらなだれなだれて熊野灘
 23 櫓で渡る島の畑や春日和

村田 郁夫
 山田 良一
 武田 巨子
 梅枝あゆみ
 川村 清子
 池田 緑人
 伊藤 孝子
 稲垣いつを
 森脇 恒夫

滋賀県

1 菜の花や比良連峰の尾根白き
 2 固まりをほぐせば四匹の子猫
 3 点さねば訪ねて来さう雪女
 4 唐橋に比良八荒の横殴り
 5 ピラミッド観ぬうち日焼して老いぬ

宮川 秀穂
 小野 雅子
 藤田 啓子
 渡辺 雛
 土井 妙子

京都府

22 境内の句碑を読み解く文化の日
 21 涅槃図の裾うつし世の人の影
 20 秋風やひらひらと来る白き猫
 19 涅槃図の老婆は釈迦の足さすり
 18 狂言の女房強し万愚節
 17 囀の瀬音に和せる朝かな
 16 吹き溜まる杉の葉屑に落し角
 15 母亡くて生家の暗き春障子
 14 明日は散る牡丹の香り濃かりけり
 13 おばしまに太鼓とよもす端午かな
 12 たんぽぽや雨に烟りし馬の脚
 11 昼月の色に仕上がる蒸鱗
 10 花野行く夕日に近きところまで
 9 煮凝や厨に土間のありし頃
 8 白シャツに大人の気配喉仏
 7 散り散りに居場所を決めて残り鴨
 6 金毘羅へ一緒に登る蟻の列
 5 夫の呼ぶ声の方なる土筆かな
 4 空分かつ飛行機雲や彼岸入
 3 村の春靴間違へし爺戻る
 2 ぶら下がるだけの鉄棒鳥渡る
 1 算盤の指生き生きと生身魂

池田 華甲
 〃
 林 力朗
 辻 睦子
 〃
 宮田早智子
 大槻 紀子
 古川 邑秋
 〃
 蓮井いく子
 大谷 昌子
 〃
 坂口夫佐子
 中村 優江
 〃
 谷田明日香
 森 あき子
 新倉 眞理
 宮谷 昌代
 能勢 ゆり
 平 万紀子
 植松 秀子

23 磔にされし干し蛸日脚伸ぶ
 24 花を発ち花に戻れり観覧車
 25 つばくらめ昭和の味を売るパン屋
 26 石鱖玉吹く子に出発の時間
 27 ふらここや押せば遠のく子の背中
 28 散りてのち椿は余生全うす
 29 松の枝に名残の雪や火葬塚
 30 落花あび白寿近しと思ひをり
 31 翔びたてる子雀源氏物語
 32 手の影を垂らし夕焼に背を向けぬ
 33 指組みてただ春暁の中にをり
 大阪府
 1 獅子舞の口から昭和覗きをり
 2 抜管し母の最期の冬終はる
 3 大西日暮仕舞ひして故郷捨つ
 4 雪柳つはものの碑へ触るるかに
 5 ただそこに立つために訪ふ爆心地
 6 組ねぶた灯の入りたる龍の髭
 7 実よりも虚のおもしろき瓢かな

福井 貞子
 小原 緑
 徳永 真弓
 〃
 横滝 友子
 重富 國宏
 〃
 西村 博子
 佐々木志う
 山内 利男
 大藪眞知子
 森 佳月
 瀬野 浩
 〃
 今井 文雄
 〃
 守作けい子

8 竜天に登る風雲ただならず
 9 地虫出づ風の合図を皮切りに
 10 しばらくは敵味方無し春満月
 11 粃筵太平洋に耳揃へ
 12 風起ほどにあらずに黒揚羽
 13 風花の風に生まれて風に消ゆ
 14 青麦や今も荒川燃料店
 15 宝物隠すごとくに木の実植う
 16 惜春やはらりと落つる本の帯
 17 氏子らは米寿卒寿の初神楽
 18 蔦の蔓ばかりの魚籠を覗かる
 19 そこにのみ日の当たりたる返り花
 20 初蛙木地師の里の瑞々し
 21 ほうたるに生命線を窪めけり
 22 かはらけの一投ごとに春の風
 23 啓蟄や親の遺影に似てきたる
 24 歌舞伎座の三階席の日永かな
 25 サイダーの泡の七色磨崖仏
 26 足跡は男の歩巾深田凍つ
 27 冠雪の月山を背に村芝居
 28 悲しみに膨らんでゐる涅槃絵図
 29 虎杖を噛めば淋しさ遠くより

上野 鮎太
 福島津根子
 永田 圭子
 小畑 晴子
 藤堂 俊英
 滝本 香世
 矢吹あさゑ
 山本そよ女
 大西富紀子
 藤岡 満
 阪井 京子
 中村 久子
 大島 幸男
 〃
 〃
 〃
 深水香津子
 甲斐 百夏
 白木原玲子
 三宅 崇代
 〃
 師岡 洋子

30 寄せ書きは君の隣に卒業す
 31 烏賊を干す家ごとにある船着場
 32 春耕や海に一声牛鳴けり
 33 遠洋の夫どのあたり畑を打つ
 34 ひとつでは寂しきものに風車
 35 焼杉の木目浮き立つ時正かな
 36 味爽の神島過る渡り鳥
 37 まなざしを遠くに花葉明りかな
 38 天目に散り込む桜緋毛氈
 39 白鳥座の真下の草に待つ火花
 40 さみしさの身をうらがへし泳ぎけり
 41 寒紅やパリ留学を決意して
 42 風涼しトンネル出づる保線夫に
 43 枕木にあはせる歩幅蝶の昼
 44 町の名の榎の大樹芽吹きたる
 45 蛸や手に残りたる傷の痕
 46 萱公の産湯ここにも亀鳴けり
 47 夜桜やオール収めてたゆたへり

和田 恵子
 吉田 喬
 〃
 山内 節子
 西田 洋
 角野 京子
 中家 桂子
 土田 善子
 倉渕 礼子
 檜崎美和子
 〃
 山内 繭彦
 鵜川 久子
 池之 小町
 西村 妙子
 政元 京治
 藤川 喜子
 新谷 壯夫

奈良県

1 春立つ日宇国旗色の鶴を折る
 2 震災の怖さ知ってる雛飾る
 3 春山の鳥となるまで遊びけり
 4 雨の日の巢燕ぎゆうぎゆうぬくめ合ふ
 5 夙や歳月友を減らしゆく
 6 ボロ市の店主隣へ入り浸り
 7 白魚の透ける命を見て倦かず
 8 補陀落へまんじに組まれ花筏
 9 正門の桜を残し廃校す
 10 花人の中行く大いなるザック
 11 切株の年輪たどる日永かな
 12 駒返る草業平の通ひ道
 13 教頭はオルガン上手麦の秋
 14 花筏のこして乾くにはたづみ

高塚 康文
 田村 英一
 〃
 山中 宏子
 田村 英一
 堀上 慶子
 小島 元博
 芦田 芳久
 長谷川紀美子
 堀上 慶子
 富安トシ子
 延永 和枝
 吉川 遊壺
 小林伊久子

兵庫 県

5 魚河岸の生簀からつば山笑ふ
 6 浮島は植物遺体春うらら
 7 笛を吹く形の指や流し雛
 8 絹の道ここにて終ひかたつむり
 9 ひと吹きが幸せの数しやぼん玉
 10 卒業の子らと頬張る握り飯
 11 春の星あつけらかんと逝かれけり
 12 昭和の日柱時計の昭和の音
 13 水桶の貝が水吐く入彼岸
 14 桜咲き村は昔をとりもどす

豊田 義久
 羽賀 明
 白井 慶
 笠原 祐子
 宮本 啓子
 中浴 智美
 〃
 佐戸 律子
 池田 光子
 保田 敏子

和歌山 県

1 赤海鼠赤黄男と語りたき酒よ
 2 ぐんぐんと近づき来たる芽吹山
 3 線量が分けるふるさと水温む
 4 熱爛やこころの熾をかき立たせ

倉田 信司
 津田 京子
 田中 衡子
 長谷川閑乙

1 早苗饗の仕上げ越中おわら節
 2 海苔舟の水脈に光の分かれゆく
 3 子に話すごと樹に話す日永かな
 4 浦風は泳がせ上手鯉のぼり
 5 茶摘女の夜は音読の宇治十帖
 6 碁敵に夫を託して菊根分
 7 啓蟄や不法投棄の資源塵
 8 漱石忌猫派犬派とにぎにぎし

長井 良孝
 松下 孝裕
 出店智恵呼
 岸本眞智子
 草刈 朝男
 莊野エイ子
 金泉 萬楽
 望月 恵舟

9	弘法市目刺の臭を持ち歩く	田中 敏子
10	父母の短命長寿万灯日	越智 建之
11	大寒の涙庇となる睫毛	野垣 高城
12	梅東風や更地に残る古井筒	田中 愛子
13	補助輪の取れ春風に突進す	公江 耀子
14	鉾杉の鉾天を突く吹雪く中	たなかしらは
15	校庭は子らをこぼさず青田風	千鳥 由貴
16	鳥の虹ちさき鱗ある飾り皿	小林あつ子
17	春の虹見る子に校舎傾きぬ	谷添 睦子
18	記念樹の大きく育ち花は葉に	岸下 庄二
19	返したる平目に貌の無かりけり	瀬戸 幹三
20	杉葉生ふ朝のひかりの野辺の墓	市川 臺子
21	夏近し星のマークのスニーカー	中村ちづる
22	絵踏の島いま国境守る島	中西久美子
23	ふるさとの山は濡れ色春の月	秋山 薦
24	桜しべ降れり絵地図を開くとき	升田ヤス子
25	宵節句金平糖は角で立つ	志々見久美
26	重さなき小さき古巣を掌	常澤 俣子

鳥取県

1	仕舞湯の菖蒲でみがく踵かな	玉井 瑛子
2	黄金の夕日落ちゆく花菜畑	〃
3	わが影をばさと放ちて黒揚羽	〃
4	田の隅に風の寄り道余り苗	〃
5	木洩れ日とひとつになりて雀の子	〃
6	風紋の尖る砂丘にある余寒	山田 哲夫
7	ニッポンの学名背負ひ朱鷺巢立つ	大下 秀子
8	はばたきてあけぼの色や朱鷺の雛	〃
9	山城を訪ふは風のみ竹の秋	村上万亀重
10	土筆野へ開いてをりぬ非常ドア	西村ゆうき

島根県

1	隠れ耶蘇の里に一筋蜷の道	吉浦 増
2	四百年の天守を指呼に梅の花	〃
3	目玉焼ぶると合格通知来る	江角 純子
4	どの子にも応へる笹木の芽山	万代 紀子
5	豊神酒を積みて始まる里神楽	小澤 巖
6	三寒の窓くもらせる牛の息	八嶋 昭男
7	観客は畑の一人さへづれり	〃
8	探梅や風は刃物のごと尖り	足立 歩久

9 揃ふまで言葉つつしむ雑煮の座

足立 歩久

岡山県

1 ふらんすより戻りし鞆荷風の忌
2 溽暑かな牛舎の隅の塩の桶
3 こんなにも足の大きく卒業す
4 朝顔のあす咲く花を数へをり
5 冬の川中洲の一つ増えにけり
6 躰糸とりし制服桜餅
7 新涼や風に一線ひくごとし
8 啓蟄や買はずに出づる地下の書肆
9 御機嫌は裸になりて赤ん坊
10 茎立ちの空だんだんと近づけて
11 雛段昏しオルガンに鳴らぬ音
12 隧道の出口半円の秋景色
13 島の子の海へこぎ出す半仙戯
14 ユトリ口も嗣治も見て日脚伸ぶ
15 鉄かつぐ人と呼はるる蝶の昼
16 蛇いでて時折近き海の音
17 伏せて待つ盲導犬に花吹雪

柴田 奈美
景山 薫
藤田 明子
三宅 作蔵
池田 純子
脇本 妙
丸山 敏幸
工藤 泰子
小西 瞬夏
島村 博子
安藤 加代
四宮 和美
岡田 邦男

18 逆引きの辞典を捲る三鬼の忌

岡田 邦男

19 雪を搔くひとりの時間使ひ切り

〃

20 竹馬を追ひかけてゐる三輪車

〃

21 三日月の形にたたむ紙風船

磨家 泉

22 待合へまろき飛石花ふぶき

松尾 佳子

23 鷺の巣を見上ぐる知らぬ者同士

宮本いずみ

24 春隣君は向かいのホーム行く

ゑゐ 吉

25 的の中の音に黄蝶の舞ひ出づる

横田 多禾

広島県

1 豆を打つ声はづみけり船溜り
2 寄居虫の這ふ音のする夕曇り
3 水仙の苞より雫したたれり
4 広島忌鉄柱の影濃かりけり
5 男三瓶より日照雨のきたる花野かな
6 コスモスの風に口笛のせにけり
7 鶉の嘴のしづく籜に光りけり
8 玉垣は水禍のままに七五三
9 万緑や真直くなる道尽きて海
10 見張鴨首すちが日を照り返す

坂本たか子
〃
〃
〃
〃
〃
〃
石橋 康德
〃
坂本たか子

11 水攻めの濠を囲みて草いきれ
 坂本たか子
 12 風花や並べ立てたる琴の材
 〃
 13 祇園へと陽炎ふ橋を渡りけり
 〃
 14 差し潮のかがよふ島の雛流し
 〃
 15 藁に日の溢れたり子規の塚
 〃
 16 菜を間引く姫がひとり裏屋島
 〃
 17 梅真白父に終りし丘の畑
 小林 洋子
 18 炊き立ての新米稚のにはひせり
 渡里トモ枝
 19 貨車過ぎてなほ揺れてをり姫女苑
 坂本たか子
 20 上げ潮の川の匂や地藏盆
 〃
 21 枯れ山に囲まれ飲むや延命水
 〃
 22 絵馬が絵馬叩きてゐたり桜東風
 〃
 23 銃眼に蜘蛛が罥を張りゐたりけり
 〃
 24 きさらぎの浪の音なり大砂丘
 〃
 25 紙漉くや先づ荒神に神酒ささげ
 〃
 26 末枯や腹を返せる猫車
 〃
 27 白南風や海へ尽きたる滑走路
 〃
 28 花栗の盛りの綾子生地かな
 〃
 29 水羊羹ちちは亡くて夫亡くて
 〃
 30 大夏日船は腹より水吐けり
 〃
 31 梧桐の幹あをみけり寒の雨
 〃
 32 メモになき鯛焼二つ買ひにけり
 池田 萩邨

33 稲刈つて村は寂しき色となり
 下村 幸夫
 34 草々の勢ありけり獺祭忌
 坂本たか子
 35 潮入川へだて踊の櫓かな
 〃
 36 みちのくの空の冥さや菊贈
 〃
 37 原爆忌あぶく一つが川流れ
 〃
 38 投げ餅で終はる御田植神事かな
 〃
 39 輔場の土間のでこぼこ蟹走る
 〃
 40 青鷺の脛に細波寄せゐたり
 〃
 41 冬怒濤古墳の裾にさがりけり
 〃
 42 我が子ほど涼しきものは無かりけり
 〃
 43 胸中を吹き抜くる風さくらどき
 〃
 44 農小屋の開けつ放しの遅日かな
 新長 麗子
 45 節分草守る村に來し片付け屋
 岡田 栄子
 46 香道のごと鰯酒の香り嗅ぐ
 神根 信
 47 春炬燵母に合はする仕舞どき
 石橋 康徳
 48 秋あかね雲低ければ低く飛ぶ
 坂本たか子
 49 潮の香の強くなりけり夏隣
 〃
 50 口開けて魚の煮あがる薄暑かな
 〃
 51 鵜籠編む竹ひるがへす小春かな
 〃
 52 金堂の裏戸つくりひ松の芯
 〃
 53 ひろしま忌橋の下には橋の影
 〃
 54 遠山に雨残りたる水鶏かな
 〃

55 潮引いて石蓐ひたひた帯をなす

56 同じ耳三代揃ふ彼岸寺

57 寒稽古終へて横切る爆心地

58 乗り継ぎの駅の中まで花吹雪

59 乾杯の姫と大蛇や神楽果て

60 古稀にして村の若者春田打

61 語り部の歪みたる眉夾竹桃

62 卒業の子よりも母の誇らしく

63 月餅やゴビの起伏に月浮かぶ

64 六月の沖縄静かなる怒濤

65 春うれし切符飛び出す改札機

66 島を出る十五の春や銅鑼の音

67 尾瀬の涼しさ木道の長さこと

68 ふらここに座して死に方考へる

山口県

波多野千鶴子

中村 文子

小都 妙子

杉原美穂子

下末かよ子

川手 和枝

飯野 幸雄

長尾 敏子

藤谷 知子

早川さき子

野間しげる

5 一升の枀には一升豊の秋

6 三叉路といふ突当り寒戻る

7 引く鴨の殿は首やや長し

8 水底の鯉や水面の冬紅葉

9 新緑に日々埋もれゆく五重塔

10 冬ざれの古墳に開く穴ひとつ

11 海峡を望む城跡花満ちて

12 この場より出撃せしと花葉揺る

徳島県

大山 洋子

河瀬 洋司

金本 晶子

中田てつ子

寺堂 良子

島津 教恵

1 白球の泥にまみれて夏来たる

2 花盛り札所の塔に地獄絵図

3 麗らかや触るれば丸む団子虫

4 わが古希の初蝶白く日を返し

長山 敦彦

本庄 潮乃

蓮池 照子

田村 寿美

1 荊冠のごと裸木に大古巢

2 絮蒲公英原爆ドーム常に潰ゆ

3 九年母や墓を仕舞うて故山なし

4 うれしさを抑へきれない初蝶来

吉次 薫

大山 洋子

香川県

1 道元の本高く積み冬籠

2 亡き母の杖にも光日脚伸ぶ

涼野 海音

島田 章平

3 ここからは原発敷地いぬふぐり
4 花杏一本道の長寿村

島田 章平
植田 桂子

5 校庭にいくつもの輪や卒業生
6 花菜畑ぐるりと廻る縄電車

端 あつ子
白山えいじ

7 落花敷く礎の一步を畏れけり
8 手びさしに蛇とぞ鳶の唾へしは

名越 奈緒
原 文子

愛媛県

1 向日葵の空と大地が戻るまで
2 蝶凍てて空透きとほる蒼さかな

荒川 月
曾我部剛生

3 丸太椅子少しぎくしやく春うらら
4 地虫出づぶつきら棒を押し通し

石丸千恵子
穴野 宏治

5 書きためる天声人語昭和の日
6 静かなる母の近きに匂鳥

楠本たけし
〃

7 弘法の池満々と田植時
8 青空の眩しさに解く懸想文

〃
岡本 千秋

9 雲版に届く涅槃の日ざしかな
10 こんなにも立派な空家犬ふぐり

山中 清子
野村タカ子

11 ランドセル似合はぬ背丈卒業す
12 この国の民も海から燕来る

曾我部たかえ
原田 和子

高知県

13 汗拭ふ明治の祖父の荷瘤かな
14 やはらかく鳥を入るるや夕ざくら

立花 慶舟
中山 麻子

15 たんぽぽや国裂かれゐる空の涯
16 春炬燵幸せそうな愚痴を聞き

櫛部 天思
井上 哲子

17 若鮎やひかりは水の影となり
18 源氏の血いまにつたへる桜咲く

江崎紀和子
〃

19 横抱きに釣針外す花見鯛
20 したたかに項を吹かれ冬薔薇

青野 忠重
松井 洋子

1 上り鮎四十川を選びけり
2 とある日のとある時間の春の虹

藤原佳代子
亀井しげみ

3 七厘を買うて目刺を買ひにけり
4 花ちるや地に晩年の膝頭

川添 弘幸
宮尾 直美

福岡県

1 つちふるや柩これほど軽きとは
2 若草に置かれしままのランドセル

篠原 敬祐
花田 京次

3 鮎釣りのぐいと上げたる光かな
 4 臥して見る木々のそよぎも花の世も
 5 登り来て父よ母よと墓洗ふ
 6 三寒四温吾が道進む一歩づつ
 7 ブカブカとオルガンの鳴り土筆出る
 8 満開の桜の幹にある火照り
 9 迂闊にも紙に指切る利休の忌
 10 目刺一連記憶の底にかしら右
 11 湯たんぽの畳ぬくめてゐたりけり
 12 啓蟄や棒切れ好きな男の子
 13 本流に出て緩びたる花筏
 14 山羊の旋毛やままこのしりぬぐひ
 15 風船を持たせて百日祝かな
 16 燕来る湖上に白き音楽堂
 17 亀鳴くを待ついたづきの身ほとりに
 18 風涼し賽の河原のたけとんぼ
 19 名をもらひ居着く野良猫彼岸寺
 20 再びといふ今日はなし初桜
 21 この星に八十億の息白し
 22 ゆるやかにはじまるバツハ朧月
 23 一人居も子には強気に木の葉髪
 24 もののふの顔してやんま城を守る

井手 直
 宮井 知英
 〃
 磯田 萬作
 古賀 真理
 天野じん子
 坂井 愛子
 〃
 福田 隆
 山本 春海
 永田 英子
 田崎ひろ紅
 坂口 幸江
 〃
 上村 恵翠
 渡辺 孝子
 尾籠 宏子
 塩川 隆三
 松本ゆきこ
 岸原 邦代
 樋口乃利子
 〃

25 蛇穴を出づや選挙の激戦地
 26 山藤や平安よりの隠れの湯
 27 葱坊主風に吹かるる日の暮るる
 長崎県
 1 机椅子川に洗ひて卒業す
 2 草餅の粒餡どかと母の郷
 3 卒業や母の背に書く「ありがたう」
 4 囀りや豚の御産の無事終る
 5 不自由のひとつふたつや枇杷の花
 6 父母眠る被曝の丘やかげろへる
 7 薔薇描くや我が青春の遺作とし
 8 奥津城の十字架掲ぐ花カンナ
 9 難民の手に囲まるる焚火かな
 10 南溟の兜太のやうな雲の峰
 熊本県
 1 石棺は舟の形やつくつくし

奈尾 諛子
 宗 康子
 遠山 へき
 西 史紀
 出田 量子
 高永 久子
 〃
 津田 悦子
 小谷 一夫
 〃
 桑山喜久代
 牛飼 瑞栄
 〃
 芥川 卓

2 清明の杉の香たかき高野かな

甲斐 文恵

18 母の背な小さく流す啄木忌
19 露の臺風に隠れてをりにけり

平田はつみ
為成 央子

大分県

宮崎県

1 流し雛一縷の水も濁さざる

岩波千代美

2 春待つや残り一羽の千羽鶴

橋本 紅洞

3 堰越えてゆつくり結ぶ花筏

溝野智寿子

4 花の山何んにも持たず何もせず

松本 公節

5 母を拭く吾の手は母似スイトピー

吉賀 京子

6 体ごと子羊とびつく牧の春

東 久仁代

7 ひとりとはもう減らぬこと蜆汁

富川 元女

8 亀鳴くや行けたら行くといふ返事

河野 智子

9 突堤の竿のりんりつ風薫る

吾 亦 紅

10 春耕や父の血を濃く土踏まず

片岡 学

11 尾が逃げて足の逃げ出す青蜥蜴

富尾 和恵

12 長考の棋士の一手や花は葉に

押谷 隆

13 思ひ出を手放すやうに花の散る

中尾 豊子

14 虎落笛風のうつぶん晴らすかに

神本多貴子

15 名草の芽われに鼯鼠の役者あり

松尾 清子

16 そんな瞳で見ないで仔猫飼えないの

重石多鶴子

17 母さんの椅子で父さん日向ぼこ

鹿児島県

1 鉄瓶のかたかた滾る多喜二の忌

蘭 孝湖

2 枝移りしてはふくらむ初音かな

小川 莎良

3 母の手を払ふ幼子青き踏む

寶來喜代子

4 火山灰の雲越えてはるかに鶴帰る

徳田 正樹

5 爪に残る油の染みや夜学生

彌島まゆみ

6 子の目には大空の青鯉のぼり

鵜戸 千恵

7 置き去りの蜥蜴の尻尾大地打つ

窪見 れい

沖繩県

- | | | |
|---|------------------|-------|
| 1 | 石蓐苳り肩に食い込む籠の紐 | 當間タケ子 |
| 2 | 訪問の教師の膝に子猫かな | 松尾志津子 |
| 3 | うりずんや蒲葵の葉で編む子の玩具 | 西原 洋子 |
| 4 | 少年の釣糸弾むうりずん南風 | 〃 |
| 5 | 差し潮の夕日に染むる石蓐浜 | 〃 |
| 6 | 沖繩忌母に老いの日なかりけり | 宮城 勉 |
| 7 | 浜独活の花の黙道戦道 | 美里 かえ |
| 8 | 藍建ての泡沸々と熱帯夜 | 筒井 慶夏 |
| 9 | 初風の渚に拾ふ水字貝 | 〃 |

◎ 大会賞受賞者 略歴・感想

せきど
関戸 信治 しんじ

本 名 関戸信治

現住所 東京都世田谷区

略歴 昭和十六年生まれ。平成二十年より大学卒業後中断していた俳句を四十五年振りに再開。いろいろな師にご指導いただいて来たが、現在大垣の「和」NAGOMIの名和永山主宰に師事。俳人協会会員、現代俳句協会会員。

感想 この度は大会賞を賜りありがとうございます。受賞句は町内の氏神様の祭を見に行った祭の景である。狭い境内に数店の出店がありその中の一店が金魚売りであった。槽の中には金魚が群をなし、それを親子がしゃがんで見ていた。子供にねだられ五匹ほど買い透明なビニール袋に入った金魚を親子で眺めながら、幸せそうに帰って行く姿を見ていた。その時はただ漠然と金魚には重さがないのかと思っただけであった。後日何気なく歳時記を開いた頁が金魚の欄であり、突然かの日の景が蘇り瞬時に出来た句であった。

最後に御選を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。有難うございました。

いまい
今井 文雄 ふみお

本 名 今井文雄

現住所 大阪市住之江区

略歴 昭和二十三年兵庫県淡路島生。昭和四十四年ころ「濱」入会、平成二十五年八月号をもって終刊、同時に「鶴」、「煌星」入会。二十九年俳人協会会員。

感想 この度は大会賞を賜り、ありがとうございます。選者の先生方にお礼申し上げます。

俳句らしきものを始めて、年数だけは随分経ち、この間、広島を三度訪ねました。

最初は、半世紀以上前のこと。

「私はあれで家族四人を一遍に亡くしましてね」

「そうでしたか。私は……」

「それで毎日ここへ来るのです」

先ほど、原爆慰霊碑の前で線香を分け合っていた二人の老婦人の話が聞こえ、急に涙が出たことを忘れません。若い日に受けた衝撃と現在の世界情勢とを合わせての一句です。

池田 いけだ しゅうそん
萩 はぎ

本名 池田 吏

現住所 広島県広島市

略歴 平成十一年八月、創生入会。十五年一月、創生新人賞準賞、創生同人。二十三年一月、俳人協会会員。二十八年一月、東野公民館句会講座開設講師。

感想 ご選考いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

入会しましたその日から一日一句、日記のように作句して参りました。月によっては六十句にもなります。最初にご指導いただいた先生に一ヶ月分をお送りし、添削していただきました。その後○印だけになり、どうして○印にならなかったか自分で考えろとなりました。先生のご指導の根底には、平明で奥行きのある句ということでした。

受賞句は、正に一日の出来事の一端を切り取り日記としての一句でした。先生はすでに他界されておられますが、受賞句は先生のご指導の賜物と思っています。

現在は、創生代表山口美智先生です。いつも笑顔を絶やさず楽しい句会です。善し悪しがはつきりしていて納得させられます。今後共愛の鞭のご指導をお願いします。

老年となりましたが、今後共精進して参ります。ありがとうございました。

牛飼 うしかい みつえ
瑞栄 みづえ

本名 牛飼 栄

現住所 長崎県佐世保市

略歴 昭和二十七年六月長崎県生まれ。平成十八年西山常好主宰「母港」入会。二十年「母港」同人。令和二年主宰逝去により「母港」終刊。現在無所属。

感想 この度は大会賞の御通知を頂き御高選賜りました先生方に心より感謝申し上げます。

今回の受賞作はウクライナの戦争難民だけではなく様々な事情で母国を追われた人々を念頭に詠んだ句です。

平和な日本に生きている事自体に罪悪感を覚えてしまうような日々ではありますが、俳句の底力を信じて句作を続けていきたいと思っています。

しまぬき
島貫 恵 めぐみ

本 名 島貫 恵

現住所 埼玉県さいたま市

略歴 昭和三十五年六月埼玉県生れ。昭和六十三年未来図入会、鍵和田柚子に師事。平成十年未来図同人。十四年俳人協会会員。二十一年第一句集『秋澄むや』上梓。二十九年未来図賞。令和二年未来図終刊、花野会入会、川上良子に師事。

感想 この度は、全国俳句大会大会賞を頂き大変驚いています。選考にあたられた先生方に心より御礼を申し上げます。

受賞句は今年三月北海道白老町にあるウポポイ・国立アイヌ民族博物館を訪ねた時に出来た句です。アイヌの人が「愛しい人を想って歌う歌」の歌声はとても美しく、心に残りました。雪解が始まった辺りの山々には、北国の遅い春の明るさと生命力が輝いていました。今後も新鮮な感動を大切に詠んでゆきたいと思います。



第63回 全国俳句大会予告

◇募集 2句一組〈雑詠・未発表のもの〉

何組でも可。

◇会費 一組につき千円の予定。

◇締切 来年4月15日（当日消印有効）

◇送付先 〒169-8521 東京都新宿区百人町3-28-10

俳人協会「全国俳句大会係」

◇選者 追って発表します。

◇大会 来年9月10日（火）

午後1時開会。〈予定です〉

◆当日参会者より一句を募集、特選、入選句には賞品を贈呈。

会場略図



有楽町マリオン

有楽町朝日ホール

東京都千代田区有楽町2-5-1

有楽町マリオン11階

電話 03 (3284) 0131











